

# 平 尾 山 古 墳 群

—雁多尾畠49支群発掘調査概要報告書—

1989年3月

柏原市古文化研究会



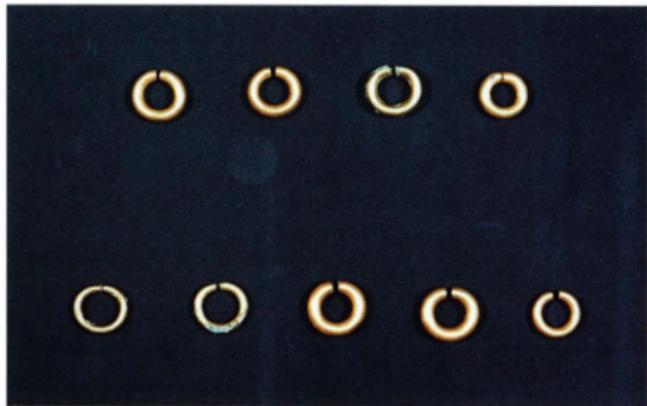
5·6·7·8·9号墳



10号墳粘土室と木炭



10号墳墓坑と石敷



金環



4号墳 銅製棺釘



和同開珎銀錢

## は　し　が　き

柏原市の東部、生駒山地の南端にあたる通称東山地域は、開発の進む大阪府下にあって今も豊かな水と緑を残し、休日ともなれば、多くの人々が草木の観察、体力の増進に訪ねる憩いの場になっています。また、一方では山間部の棚田や日当りの良い斜面地にみられるブドウ園のように、人々が生活し、豊かな自然の恵みを受けて生活する空間でもあります。さらに、わたしたちの祖先の歴史的文化遺産である埋蔵文化財という視点からみれば、2000基を数えようとする古墳の大群集地であり、歴史の豊庫という一面も合せもらっています。

近年、大都市大阪のベットタウンとして組み込まれた市域では、農業人口の減少に伴い休耕地や放置されたままの山林が増加し、そうした土地の多い東山地域は、丘陵地上に広い平坦地を確保しやすいという地形的条件もあって、再開発構想が大きく取り上げられるようになりました。東山地域のもつ様々な面をどのように選択し、将来的な展望をひらいていくか、わたしたちはその岐路に立たされているともいえるでしょう。

無秩序な自然や文化遺産の破壊が、わたしたちの生活環境や肉体、精神に悪影響をもたらしていると指摘される今、さらに、開発を優先した安易な保護策が、逆に2次的な災害、自然や歴史的環境そのものの荒廃の呼び水ともなっている状況で、東山の再開発について、一回の破壊で2度と取り戻すことのできない自然、歴史遺産であることを十分に認識し、市民一人一人が真剣に取り組まなければなりません。その際、本書もその一部である半尾山古墳群は、全国的にみても貴重な歴史遺産として、祖先のあゆみを知り、豊かな未来像を描くための歴史資料として、十分な保護が必要であると考えています。

平成元年3月

柏原市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は柏原市雁多尾畠2000-1他69筆における墳塚造成に伴い、柏原市教育委員会が実施した事前緊急発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は御堂開発株式会社（代表黒澤日出雄）の依頼に基づくものである。
3. 調査は3次に分けて行い、1次調査は柏原市教育委員会社会教育課・田中久雄（現在大津市教育委員会）、2次調査を同 安村俊史、3次調査を同 桑野一幸が担当した。
4. 整理作業、本書の執筆は各調査をそれぞれの担当者が、遺物写真の撮影、編集は桑野が行い、最終的に柏原市教育委員会社会教育課 竹下 賢が監修した。なお、1次調査の遺物火焼には仲井光代の助力を得た。
5. 本書で報告するは古墳群は、平尾山古墳群雁多尾畠支群中で新たに発見されたものであり本書では雁多尾畠49支群と名称を付した。
6. 本書で使用した方位は全て磁北（真北は磁北から約6° 東に偏している）、標高は全てT.P.である。また、各遺構の実測図中のK.B.M.（原点標高）はT.P.334.075mである。
7. 発掘調査、整理作業の参加、協力者は下記の通りである。

石田 博	松井隆彦	奥川滋敏	北野 重	石田成年	秋田大介
伊藤芳匡	稻岡利彦	今中太郎	寺尾正美	奥野 清	道旗甚藏
森口喜信	谷口鉄治	井上岩太郎	麻 栄三郎	川端長三郎	朝田行雄
山田貞一	分才春信	西岡武重	山本芳一	横関勢津子	吉居豊子
乃一敏應	松成早苗	村口ゆき子	飯村邦子		
明石 路	瑞穂建設株式会社	株式会社島田組			

8. 出土遺物、図面、写真是柏原市教育委員会で保管している。

# 目 次

巻頭カラー写真図版

はしがき

例 言

第1章 第1次調査

第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 発掘調査の成果	2
位置と環境	2
発掘調査の成果	2
1号墳	7
2号墳	10
3号墳	12
4号墳	14
5号墳	18
6号墳	18
7号墳	19
8号墳	20
9号墳	23
10号墳	23
1号墓	31
2号墓・3号墓	34
4号墓	35
5号墓	36

第2章 第2次調査

第1節 第2・3次調査に至る経過	37
第2節 調査成果	37

第3章 第3次調査

第1節 調査経過	39
第2節 調査成果	39

## 挿 図 目 次

図-1 発掘調査位置図	2	図-24 7・8号墳出土金環	20
図-2 D地区地形測量図	3	図-25 7号墳出土釘	21
図-3 試掘トレンド・ 発掘調査地区位置図	5	図-26 8号墳石室	22
図-4 1号墳石室	6	図-27 9号墳石室	22
図-5 1号墳石室内遺物出土状況	7	図-28 9号墳出土釘	23
図-6 1号墳出土土器	7	図-29 10号墳遺物出土状況	24
図-7 1号墳石室内出土釘	8	図-30 10号墳主体部	25
図-8 2号墳主体部	9	図-31 10号墳主体部内出土土器	27
図-9 2号墳出土状況	10	図-32 金環	27
図-10 2号墳出土遺物	10	図-33 10号墳出土土器	27
図-11 2号墳出土釘	11	図-34 10号墳出土釘①	28
図-12 3号墳石室	12	図-35 10号墳出土釘②	29
図-13 3号墳出土遺物	13	図-36 10号墳出土釘③	30
図-14 3号墳出土釘	13	図-37 1号墓	31
図-15 4号墳出土土器	14	図-38 1号墓遺物出土状況	32
図-16 金環	14	図-39 1号墓出土土器	33
図-17 4号墳石室	15	図-40 和同開珎銀鏡	33
図-18 4号墳出土釘	17	図-41 2・3号墓土器	34
図-19 5号墳石室	18	図-42 4号墓上器	35
図-20 6号墳石室	18	図-43 5号墓	36
図-21 7号墳石室	19	図-44 5号墓出土土器	36
図-22 7号墳石室内遺物出土状況	20	図-45 2次・3次調査区位置図	38
図-23 7号墳出土土器	20	図-46 出土遺物	39

## 図版目次

図版1	1次調査 全景	図版20	1次調査 1号墓
図版2	1次調査 航空写真	図版21	1次調査 2号墓・3号墓・5号墓
図版3	1次調査 1号墳	図版22	1次調査 A地区
図版4	1次調査 1号墳	図版23	1次調査 B地区・C地区
図版5	1次調査 2号墳	図版24	1次調査 古墳出土遺物
図版6	1次調査 2号墳	図版25	1次調査 古墳出土遺物
図版7	1次調査 3号墳	図版26	1次調査 古墳出土遺物
図版8	1次調査 3号墳	図版27	1次調査 古墳出土遺物
図版9	1次調査 4号墳	図版28	1次調査 古墳出土遺物
図版10	1次調査 4号墳	図版29	1次調査 古墳出土遺物
図版11	1次調査 5号墳・6号墳	図版30	1次調査 古墳出土遺物
図版12	1次調査 7号墳	図版31	1次調査 古墳出土遺物
図版13	1次調査 8号墳・9号墳	図版32	1次調査 古墳出土遺物
図版14	1次調査 10号墳	図版33	1次調査 古墳出土遺物
図版15	1次調査 10号墳	図版34	1次調査 古墓出土遺物
図版16	1次調査 10号墳	図版35	1次調査 古墓出土遺物
図版17	1次調査 10号墳	図版36	2次調査
図版18	1次調査 10号墳	図版37	3次調査
図版19	1次調査 1号墓		

# 第1章 第1次調査

## 第1節 発掘調査に至る経過

牛駒山系の最南端でもあり、柏原市の総面積の2/3にもあたる、通称平尾山山中には、総数約2000基から構成される、全国でも有数の大群集墳が遺存している。現状では、山林、あるいはブドウ園等として、まだまだ緑の自然を遺す地であるが、昭和40年代より、大阪近郊という地理的条件、良質の土砂を産出すること、及び、地元の果樹園経営の行詰まり等の諸要因が、当地における、開発計画に急速な拍車をかける結果となり、そのため、当地の埋蔵文化財についての把握がよりいっそう必要となってきた。そのため、大阪府教育委員会では、2度の大規模な分布調査をおこない、多大な成果をおさめ、今後予定される開発計画による、埋蔵文化財の無秩序な破壊を防ぐことに大いに貢献してきた。<sup>註</sup>

このような状況のもと、文化財保護法第57条第2項に基き、昭和60年4月15日付で、大阪御堂開発株式会社（代表取締役 黒澤日出雄）より、柏原市雁多尾畠2000-1他69筆（総面積166803m<sup>2</sup>）における大規模な墓園開発の届出が提出された。当該地は、先の分布調査では、埋蔵文化財の存在は未確認のため、柏原市教育委員会では、まず、試掘調査により、埋蔵文化財の状況を把握することが必要との判断のもと、昭和60年10月7日から10月26日までの間、第Ⅰ期工事予定である申請地の西半分（面積約52000m<sup>2</sup>）を対象として試掘調査をおこなった。調査の方法は、調査範囲内尾根筋を主として幅1m、総全長約1000mによるトレンチ調査をおこなった。この結果、奈良時代の骨蔵器、土坑、及び、遺物包含層等を検出した。この結果をもとに、引き続き、遺構・遺物が確認された部分を拡張し、発掘調査をおこなった。調査期間は昭和60年10月28日から昭和61年2月8日までおこなった。この結果、試掘調査において検出できなかった、古墳10基、奈良時代の墓2基、それらに伴う遺物等を検出することができた。今回の発掘調査では、検出した古墳のほとんどが、大井石・側石の一部が、取り去られており、半壊状態のものであるが、群構造、及び、7世紀前半から7世紀末をへて8世紀代に至るまでの墓の変遷が明瞭である等、非常に貴重な成果をおさめることができた。また昭和61年2月6日には現地説明会をおこない、木曜日にもかかわらず、多数の人々の参加を得た。しかしながら、当地は、たび重なる協議の結果、工事施工上、現状保存は、困難であることから、発掘調査に万全を期し、充分な記録にとどめ、遺跡の概要を顕彰すること、及び第Ⅱ期工事については極力現状保存に努めることを条件として、第Ⅰ期工事についての当初の計画をやむをえず認めることとなった。埋蔵文化財保護の立場からは、決して充分なものではなく、今後より一層、保存を前提として、開発計画に対処することが必要である。

註) 大阪府教育委員会『平尾山古墳群分布調査概要』1975年

大阪府教育委員会・柏原市教育委員会『柏原市東山地区における遺跡分布調査報告書』1980年

## 第2節 発掘調査の成果

### ◎位置と環境

当該地は、通称東山と呼ばれる地域にあたり、北は奈良県生駒郡三郷町より西へと深く入り込む谷によって画されており、屈曲しながらも、東西に長く伸びる主尾根と、そこから南北へと派生する支尾根によって構成される。標高は最頂部で約350mを測る。この最頂部からは、奈良盆地を一望のもとに見渡すことができ、東は眼下に王寺町、東から東南、遠方山裾には、磐墓を代表とする山の辺の古墳群、また東南の方向には、大和三山に囲まれた飛鳥の地、南は二上・葛城・金剛といった山なみを見ることができる。西方の視界は、東や南ほど開かれてはいないが、南西の方向に羽曳野丘陵を見ることができる。当該地は、調査以前は山林であって、分布調査によって7基の古墳が知られているのみで、平尾山古墳群中においては古墳分布の希薄な地域であった。

### ◎発掘調査の成果

試掘調査及び、発掘調査の結果、古墳10基、奈良時代の墓5基、土坑1基、時期不明の焼土坑10数基、溝状遺構等の他、遺物包含層等も検出した。試掘調査は、主に尾根筋にトレッセを設定したので、試掘結果では古墳の存在を確認することができなかった。しかしながら発掘調査によって、尾根筋ではなく南面する斜面に築造された古墳が次々に判明することとなった。本文では、便宜的に、5号墓を検出した地点をA地区、土坑を検出した地点をB地区、溝状遺構を検出した地点をC地区、古墳及び奈良時代の墓を検出した地点をD地区とし、A地区・D地区を主として、以下遺構・遺物の説明をおこなう。尚、今回発見された古墳は、新発見のものであるため、雁多尾畠49支群を新たに設定するものとする。



図-1 発掘調査地位置図

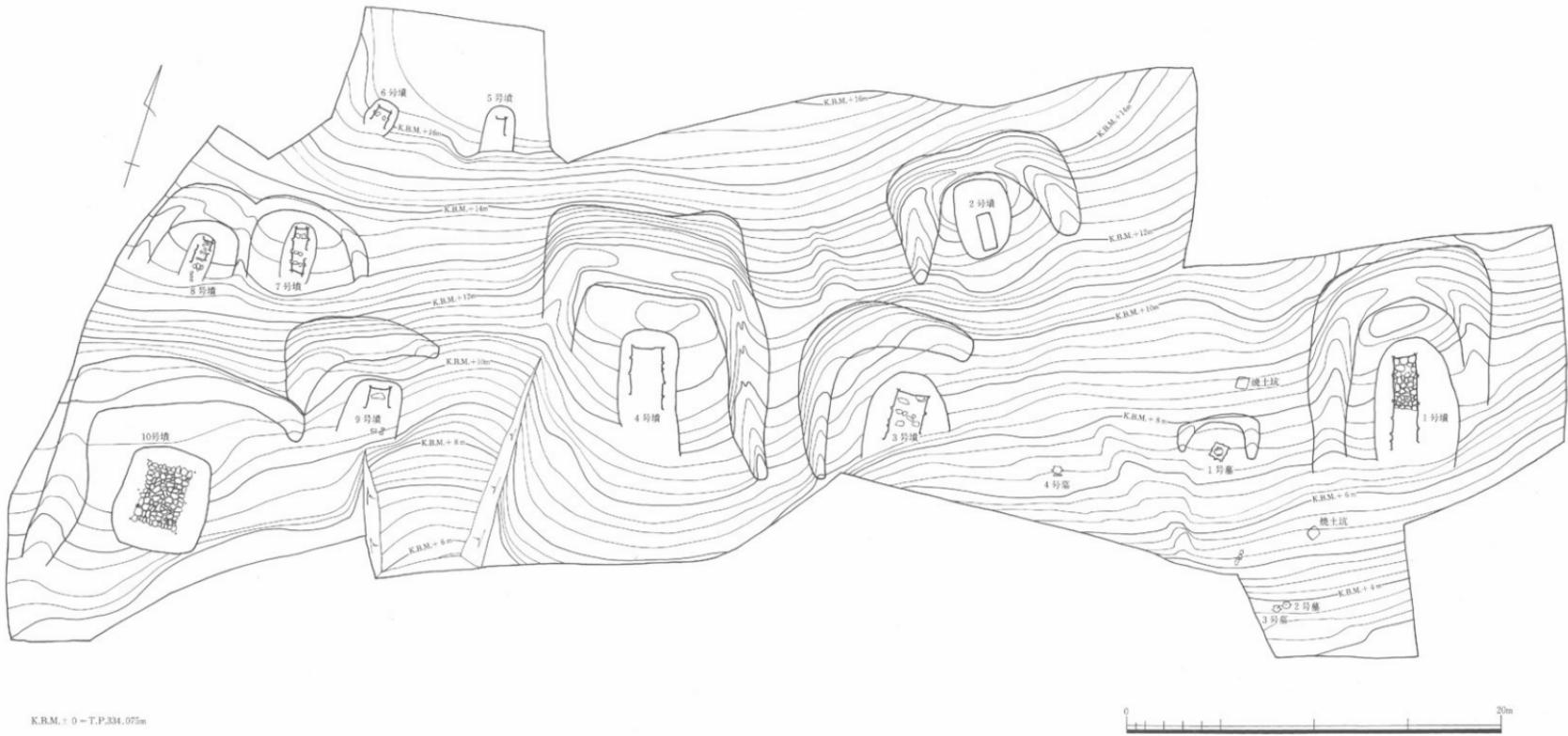


図-2 D地区地形測量図



図-3 試掘トレンチ・発掘調査地区位置図

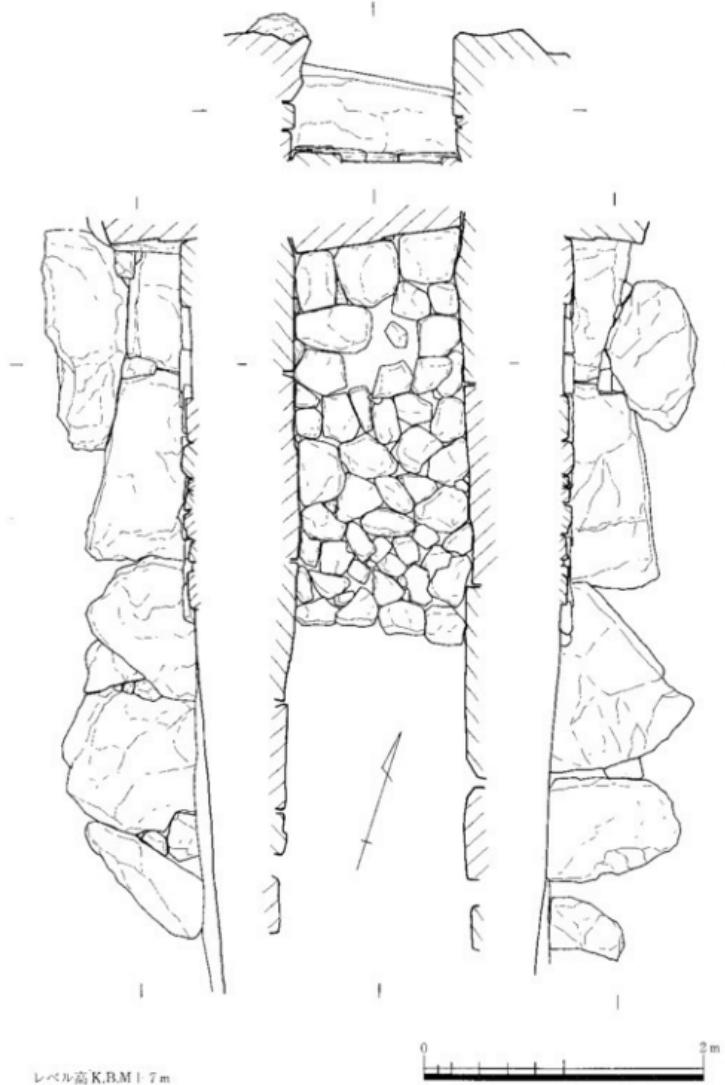


図-4 1号墳石室

◎ 1号墳

墳丘は、東西7m、南北10mの馬蹄形を呈し、南側を除く周辺に幅約2m、深さ50cmの周溝をめぐらす。墳丘造には版築の技術を使用している。内部主体は、無袖式の横穴式石室で、天井石及び壁石の一部が持ち去られている。石室の開口方向はS-18°-Eである。現状では、奥壁幅1.15m、入口幅1.4m、長さ5m、高さ0.95mを測る。床面には、奥壁から南へ2.7mの範囲内に敷石をおこなっている。石室内からは、土師器杯身（1・2）、鉄釘52本が出土した。杯身は敷石の南端より、65cmの位置に伏せた状態で置かれていた。（1）は口径10cm、高さ2.3cmで内面に方射状暗紋、見込み部に螺旋状暗紋を施す。（2）は口径10.2cm、高さ3.4cmで、体部外面に横方向のヘラ磨き、内面に2段の方射状暗紋、見込み部に螺旋状暗紋を施す。ともに、色調は赤褐色。胎上には、雲母・長石をわずかに含む。焼成は良好。（3）の

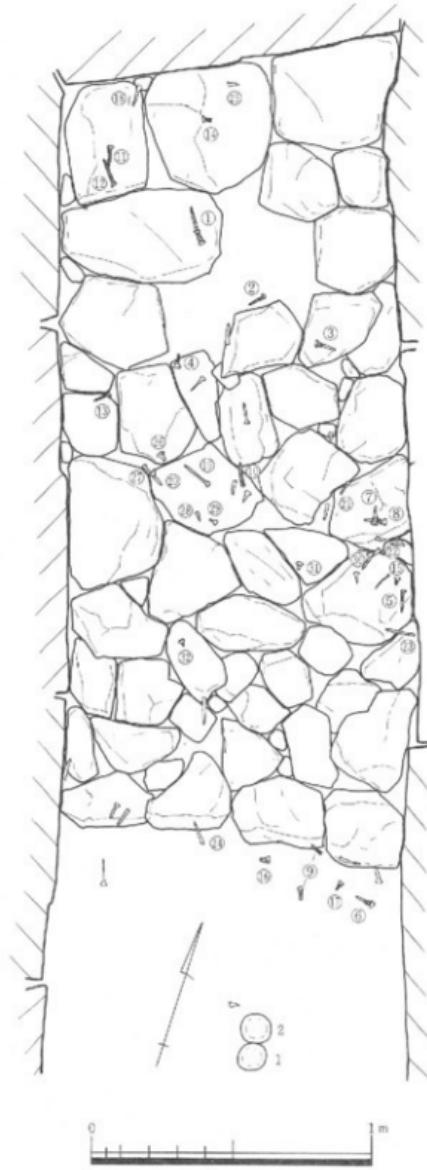


図-5 1号墳石室内遺物出土状況

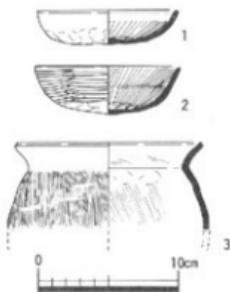


図-6 1号墳出土土器

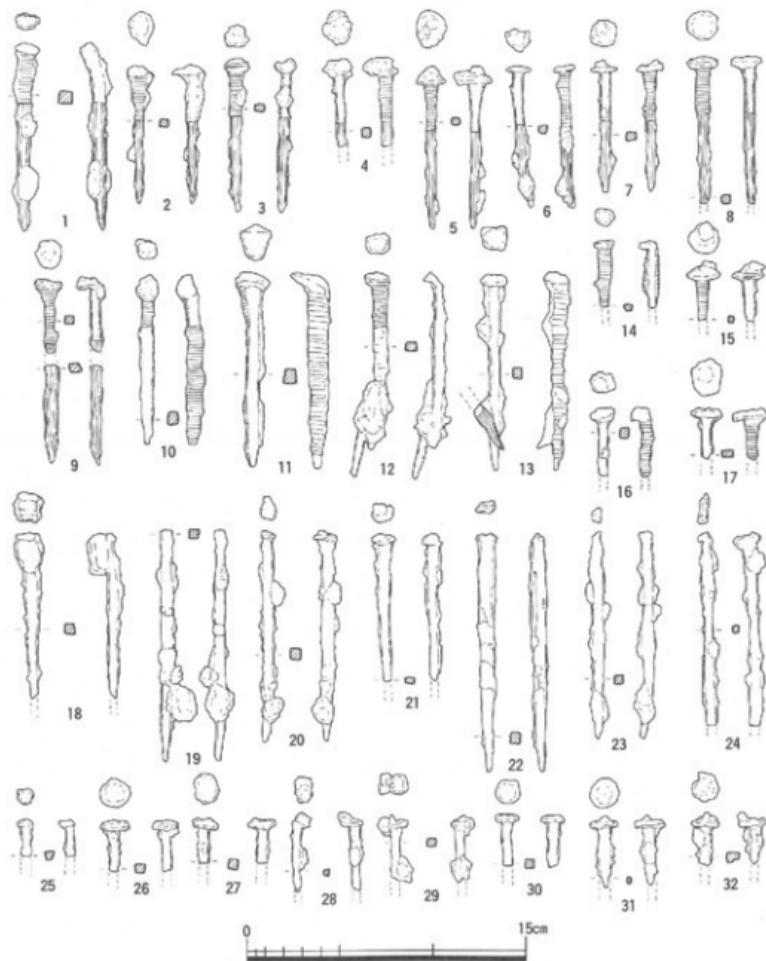
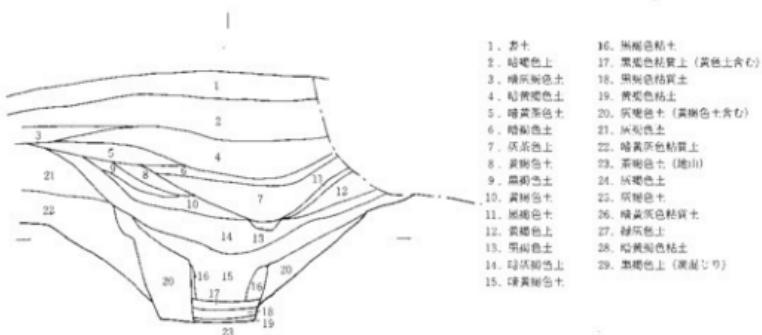
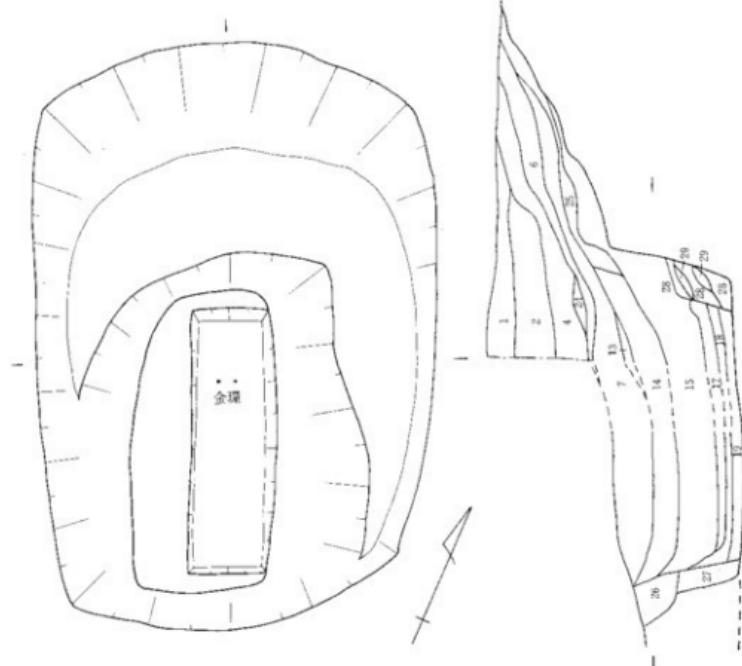


図-7 1号墳石室内出土釘

變は、石室入口部で検出したもので口径13.0cm、口縁端部は軽くつまみあげる。体部外面及び内面には、ハケ目が遺る。鉄釘のはとんどは、敷石の範囲内から出土しており、この敷石が木棺を置く棺台として認識されていたことがわかる。釘には、木質部が付着しており、その遺存状態から、A類：頭部から約3cmが釘と直交する木目で、それから先端までが平行する木目のもの。B類：頭部から先端まで、釘と直交する木目であるが、頭部より約3cmの部分で木目が直交するものである。C類：頭部から先端まで、釘と直交する木目のもの。D類：頭部から先



レベル高 K.B.M. -12.5m



図-8 2号墳主体部

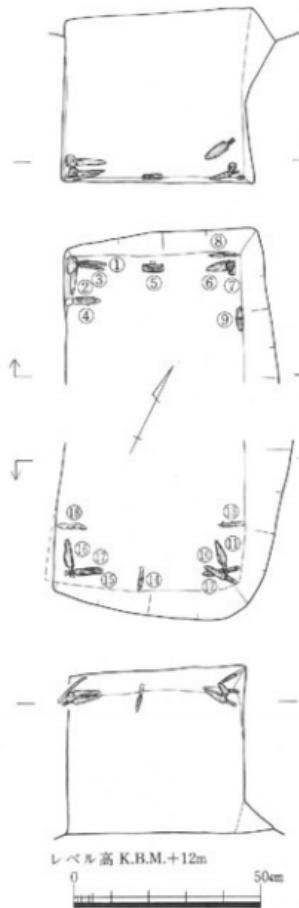


図-9 2号墳釘出土状況

小口から南へ50cmのところに、12cmの間隔を開けて東西に2つ並んで出土した。このことから頭位が北であったことが窺える。金環は、両者とも外径2.2cm、内径1.2cmを測り、断面は梢円形、銅芯には金の薄板を巻いたものである。釘は、A類（①～③・⑥～⑧・⑩～⑫・⑯～⑰）、B類（⑤・⑭）、C類（④・⑨・⑬・⑮～⑯）に分類でき、出土状態からA類が小口板と側板、B類が小口板と底板（天井板）、C類が側板と底

端まで、釘と平行する木目のもの。E類：木質部の遺存状態が悪く、木目の方向が不明なもの、あるいは、頭部・先端部が欠損しているため、分類不可能なもの、にわけることができる。また、これらの釘の使用された部位は、後に述べる2号墳や7号墳のように、現位置をとどめている釘の出土状況から、A類が木棺の小口板と側板をとめるもの、B類が小口板と天井板（底板）をとめるもの。C類が側板と天井板（底板）をとめるもの。D類は、木材の椎目が見られないことから、木材の結合とは違った用途が考えられる。この分類に従い、1号墳出土の釘を分類すると、A類（①～⑨）、B類（⑩）、C類（⑪～⑯）、E類（⑰～㉑）となる。1号墳の場合、E類の釘が多いため、積極的根拠に欠けるが、石敷奥の西壁に沿って1棺、石敷手前の東壁に沿って1棺の計2棺が納められていたと考えられる。

#### ◎ 2号墳

墳丘は、東西7m、南北7mの隅丸方形を呈し、南辺を除く周囲に幅約2m、深さ約0.5mの周溝を有する。墳丘南半は、盛土によって構築されている。主体部は、2段墓壇を有する木棺直葬で、上段平面は東西2.8m、南北1.8m、下段平面は東西2.0m、南北2.7mを測り、下段墓壇東壁によせて、幅50cm、長さ190cm、高さ40cmに復元できる木棺を納める。棺底から、現存する墳頂までは1.8mを測る。当古墳の内部主体は木棺直葬であったため、後世の盗掘をうけておらず、副葬品、棺釘等が原位置を留めていた。副葬品としては、金環が棺内北

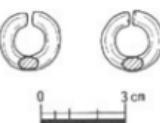
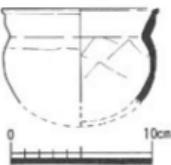


図-10 2号墳出土遺物

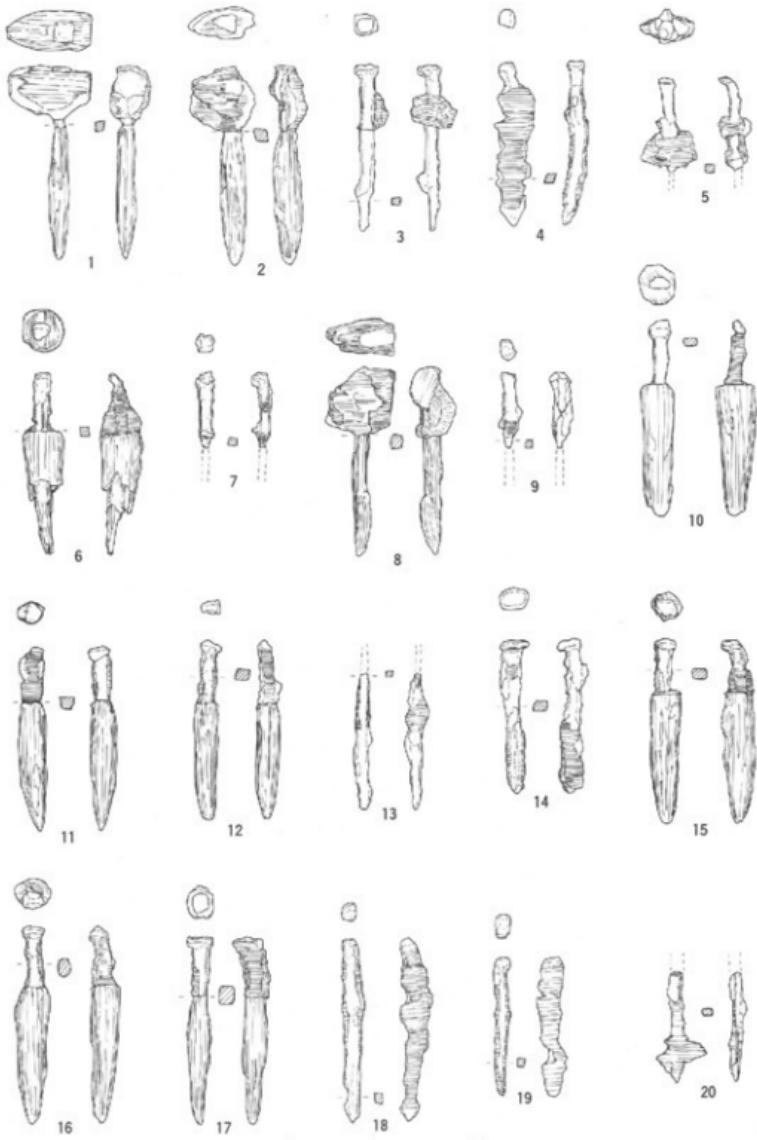


図-11 2号填出土針

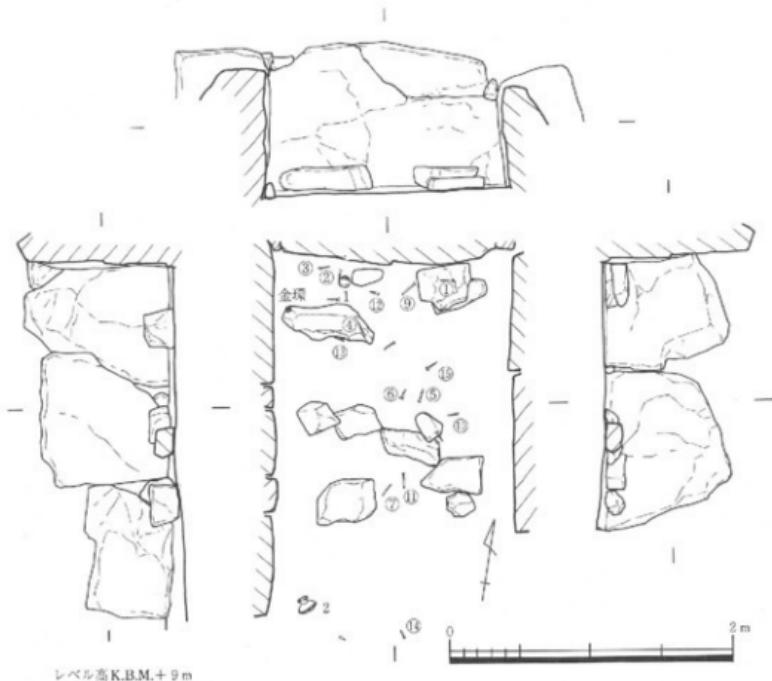


図-12 3号墳石室

板（天井板）を留めるものであることが実証できる貴重な資料である。また小口板と側板の結合に際しては、小口板の両側を凸形、側板の両側を凹形に切り込み組合せたこともわかる。棺材の厚さは、遺存する木質部から約3.5cmと推定される。主体部内には、土器は存在しなかったが、周溝内、北西部分から、土師器の堆が出土している。口径は11.2cm、体部外面には指揮え、内面には板ナデを施す。時期は7世紀後半である。

### ◎ 3号墳

墳丘は、東西8m、南北8mの隅丸方形を呈し、南辺を除く周囲に幅約2m、深さ約45~60cmの周溝を有する。墳丘は、削平されており明確ではないが、石室構築に際しては、地山を掘り込み、基底石を据え付けるものである。内部主体は、横穴式石室で、石室の開口方向は、S-7°-Eである。天井石及び、側石前半部は、遺存していない。奥壁幅は1.7m、長さ2.5m以上、高さ1.1m以上を測る。石材は1m~2m大の石を使用しており壁面は、平らにそろえている。石室内には、20~60cm大の平らな石が、奥壁から、東壁・西壁にそって並べられている。

りその周辺に鉄釘及び、副葬品と考えられる遺物が散布することから棺台であったと考えられる。それを東棺・西棺とする。東棺に伴う副葬品は検出されなかったが、西棺には、奥壁と北端の棺台の間から、金環1個、須恵器の小形高杯（1）が、また、南端の棺台から南へ60cmの所から、不明金銅製品と、台付長頸壺（2）が出土した。金環は、外径2.3cm、内径1.8cm、断面梢円形で、銅芯に金の薄板を巻いたものである。小形高杯は、径8.9cm、高さ5.3cmで脚部が短く広く。台付長頸壺は頸部を欠損している。肩部には2条の凹線を施し、その間を紋様として列点紋を繞らせている。脚部には径3mmの小孔を3方に開けている。裾部には鈍い三角形の突帯を繞らす。棺釘は、A類（①～⑧）、B類（⑨）、C類（⑩・⑪）、E類（⑫～⑯）が存在する。出土状態は良好ではなく、かなり人為的に動かされているようである。木質部の遺存状態から、棺材の厚さは約5cmと考えられる。

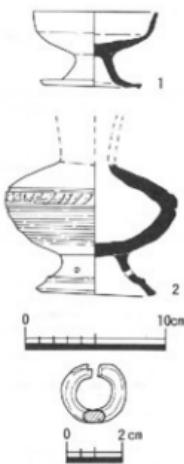


図-13 3号墳出土遺物

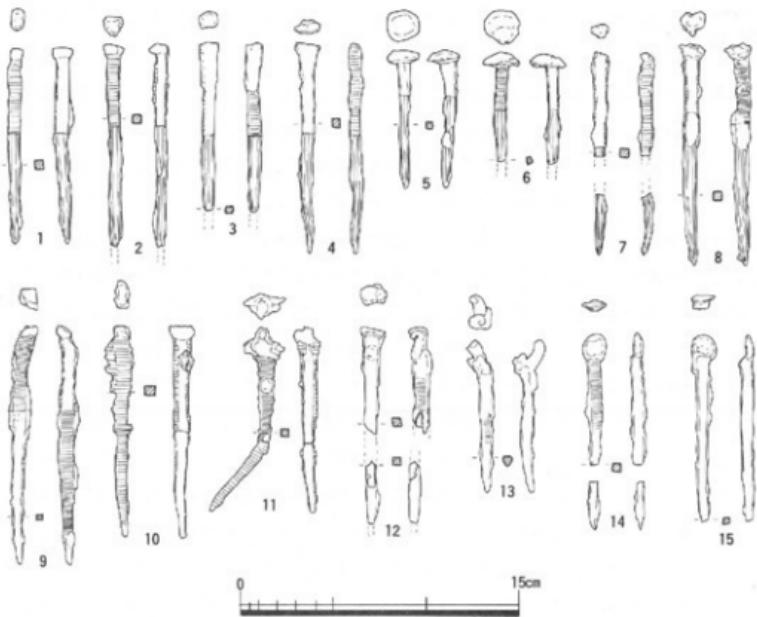


図-14 3号墳出土釘

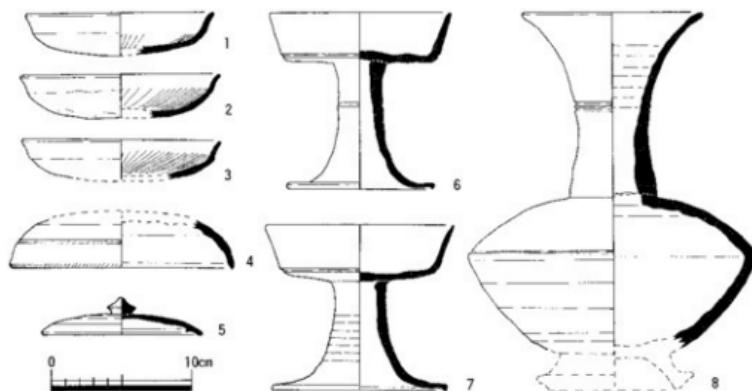


図-15 4号墳出土土器

◎4号墳

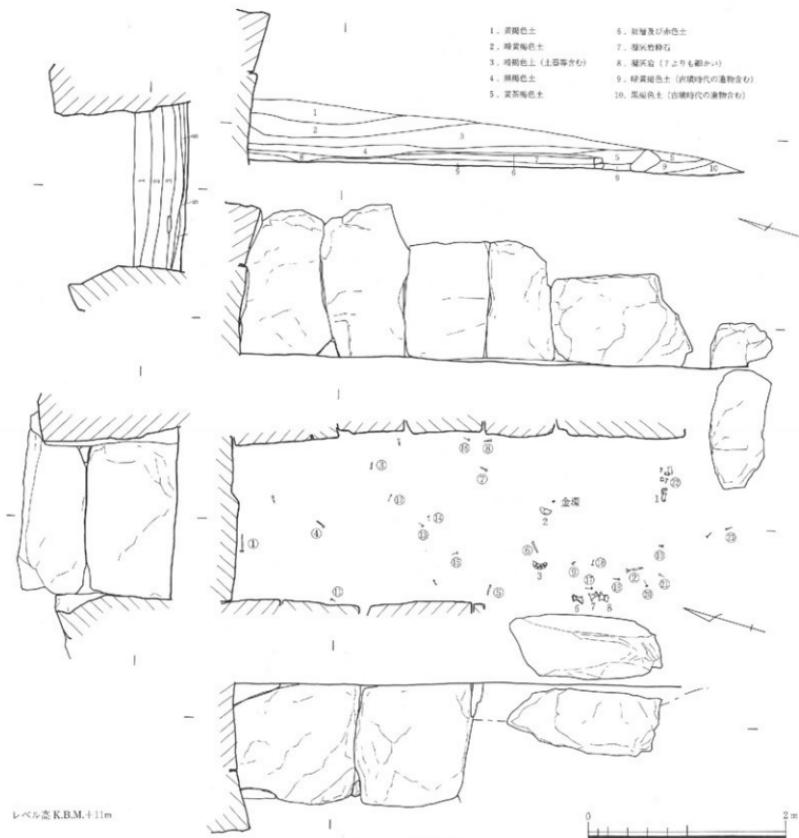
墳丘は、東西10m、南北11mの方形を呈し、南辺を除く周囲に幅約2~3m、深さ80~90cmの周溝を有する。墳丘は大部分盛土によっており、石室は、墳丘築造と併行して構築されたと考えられる。主体部は、横穴式石室で、おそらく無袖

図-16 金環

と考えられる。石室の開口方向は、S-16°-Eである。天井石及び、側石前半部は遺存していない。奥壁幅は1.55m、入口幅1.65m、長さ4.5m以上、高さ1.5mを測る。石材は1~1.5m大の方形の切石を使用しており、壁面は平らに仕上げられている。石室内に堆積していた土層の状況から、床面から暗黄褐色土、凝灰岩層、炭層、黒褐色土、暗褐色土となり炭層より上層には、古墳時代及び中世以後の遺物を含んでいる。また、凝灰岩層は、凝灰岩製の石棺が使用されていたことが窺える。当古墳に直接関係すると考えられる遺物は、凝灰岩層及びその下層から出土したもので、金環1個、土師器杯身3個体分以上、須恵器杯蓋、高杯2個体以上、長頸壺、鉄釘、銅釘等がある。金環は、外径2.0cm、内径1.1cmで断面は円形に近い。銅芯に金の薄板を巻いたものである。土師器の杯身(1~3)は、口径13.5~14cmで、内面に斜方射状暗絞を施す。口縁部には強いナデを施す。端部は丸い。須恵器の杯蓋(4)は、細片である。復元口径は16cmで、天井部と口縁部との境に凹線を施す。また、口縁端部外面には、刻み目を繞す。高杯(6)は、口径13cm、器高12.6cm、杯底部と口縁部の境及び、脚部には、凹線を施す。(7)は、口径13.4cm、器高11.8cmで杯底部と口縁部の境に凹線を施す。脚部には、粗いカキ目が遺る。長頸壺(8)は、口径13cm、遺存長24cmを測る。頸部長は13cmで口縁部を大きく聞く。頸部中央には2条の凹線が繞る。胴部は算盤玉形を呈し、肩部に1条の凹線を施す。また、周溝内から、須恵器の杯蓋(5)が出土している。口径は11.4cmで、天井部には、宝珠形つまみ、内面には短いかえりを有する。鉄釘は、A類(3)、B類(1)・(2)、C類



0 2cm



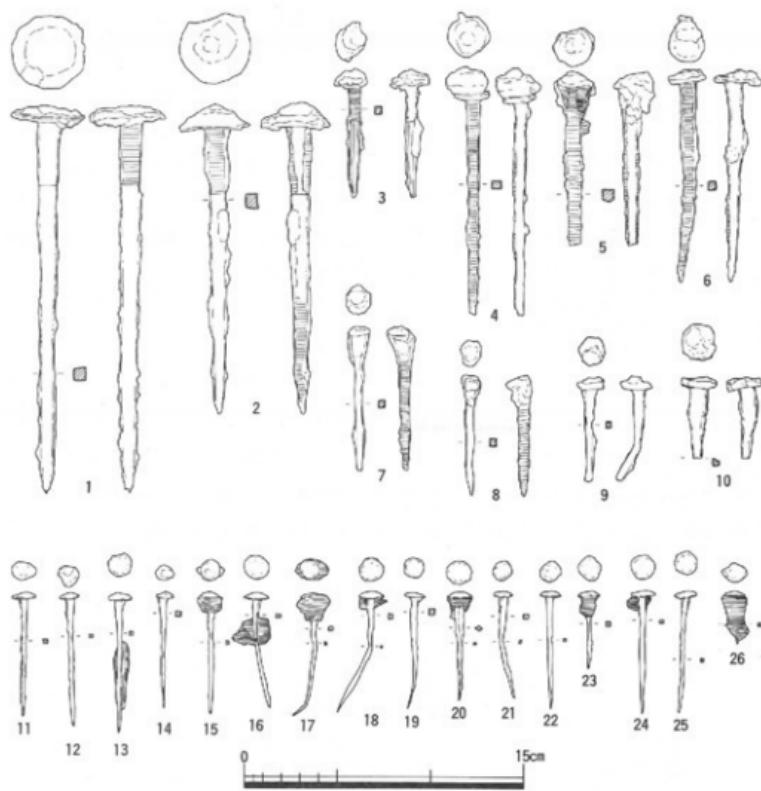
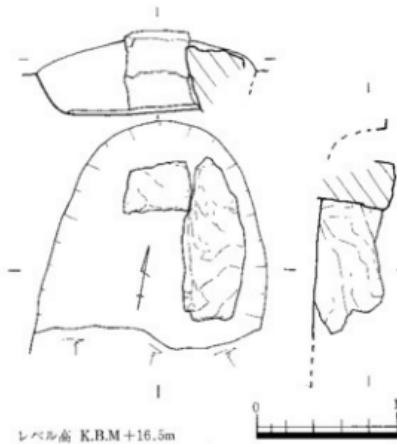


図-18 4号墳出土釘

(④～⑧)、E類がある。B類の(①・②)は、20cm以上の大形のものである。銅釘は、頭部が扁平な半球状で、この部分に鍍金が施されている。長さは6～7.5cmで、断面は1辺2～3mmの方形を呈する。これらの釘にも木質が付着しているものがあり、頭部から約2.5cmまで釘と直行する木目が遺るもの(⑯～⑰・⑲・⑳・㉑・㉒)、それ以下先端まで釘と平行する木目が遺るもの等がある。これら銅釘は、棺材を結合させるだけでなく、装飾的な役割を持ったものである。鉄釘・銅釘の出土状況からは棺の位置等を推定することはできない。また、副葬品と考えられる土器類は、石室南半部に集中しており、追葬時のものとして理解するのが妥当である。



#### ◎5号墳

当古墳群中、最高所に位置し、周溝は有さない。主体部は、小石室。主軸は、S-10°-Eである。天井石及び側石南半部は、遺存していない。奥壁幅50cm、長さ85cm以上、高さ53cm以上である。石室は、地山を掘り込んで構築されており、50~100cm大の小形の石材が使用されている。副葬品・その他の遺物は遺存しなかった。

#### ◎6号墳

5号墳の西方6.0mに位置し、当古墳も周溝を持たない。主体部は小石室で、天井部、側石南半部は遺存していない。主軸はS-10°-W。奥壁幅は75cm、長さ115cm以上、高さ50cm以上を測る。石室内には、副葬品・その他の遺物は遺存しないが、20cm大の石が2つ並べて置かれており、棺台と考えられる。

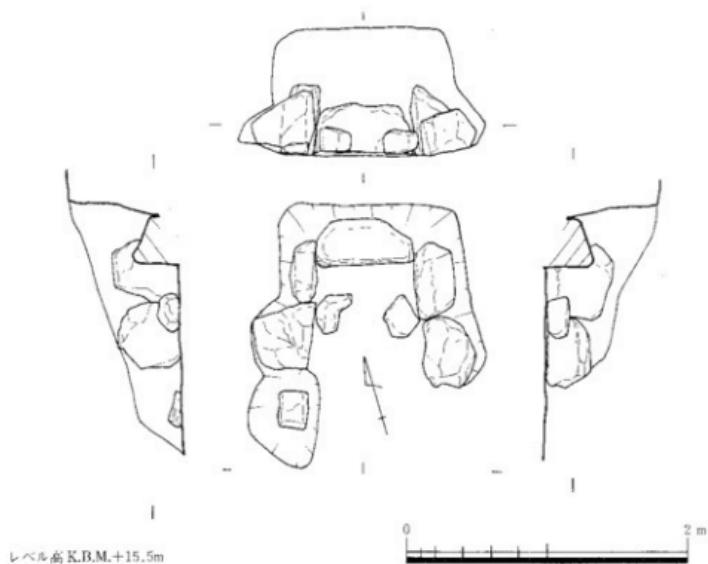


図-20 6号墳石室

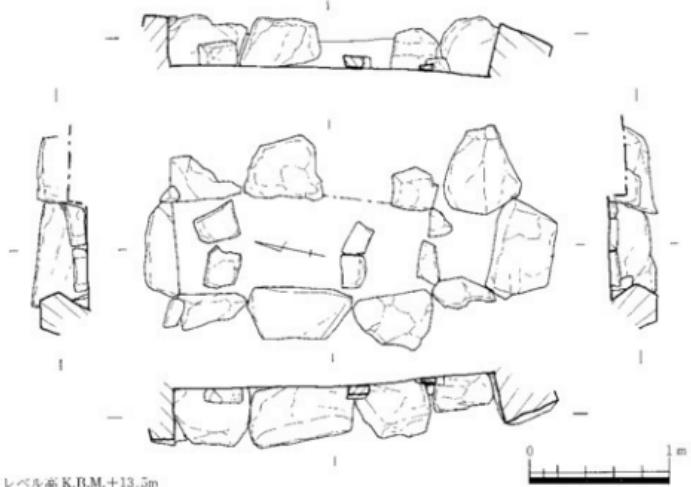


図-21 7号填石室

◎7号墳

墳丘は、東西6m、南北5mの隅丸方形を呈し、南辺を除く周囲に幅70cm、深さ20cmの周溝を有する。主体部は小石室で、主軸は、N-12°-Wである。石室は、地山を掘り込んで構築されており、50~60cm大の石材を使用している。北側小口幅0.7m、南側小口幅0.6m、長さ2.25m、高さ0.4m以上を測る。石室内には、棺台と考えられる扁平な石が6個体遺存しておりその周辺に鉄釘が出土している。副葬品には、金環1個、土師器杯身、須恵器脚付長頸壺が1個体づつ出土している。金環は、外径2.2cm、内径1.4cmで、断面は円形を呈する。細身のもので、銅芯に金の薄板を巻いたものである。北小口付近より出土しており、頭位が北であったと考えられる。土師器杯身(1)は、口径10.4cm、器高2.7cmで、口縁端部は軽くつまみあげて丸くおさめる。内外面とも劣化が著しく、調整は不明。色調は暗褐色。胎上には、雲母・長石を含む。焼成良好。脚付長頸壺(2)は、口径9.7cm、器高23.2cmを測る。頸部長は9cmで、口縁部は外彎し、端部は丸くおさめる。肩部には凹線が2本繞り、肩部下半はヘラ削り。それ以外の部分は横ナデ。脚部は裾部がゆるやかに広がり、端部は上下に拡張する。径6cmの円孔スカシを1個有する。内面底部には、棒状工具によるつき込み痕が遺る。これらの土器類は、石室南東隅に完形のまま置かれていた。鉄釘は、A類(①~⑩)、B類(⑪~⑯)、C類(⑰~⑲)、E類が存在する。A類の出土位置は、北小口部分と南小口部分に集中しており、各小口部分から12本づつ出土している。また、C類は、その間の両側石に沿って出土している。2号墳ほど、良好な出土状況ではないが、木棺の構造を知るうえで貴重な資料である。棺台及び、

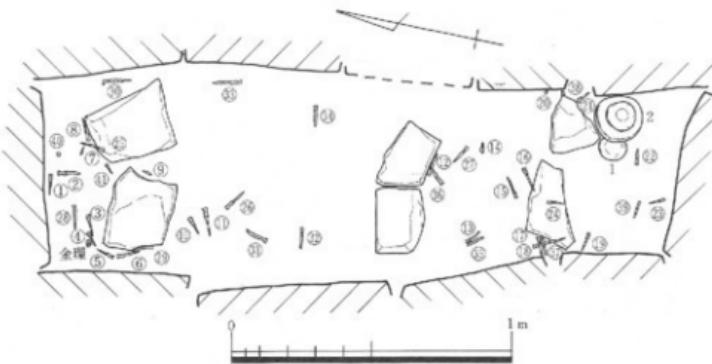


図-22 7号填石室内遺物出土状況

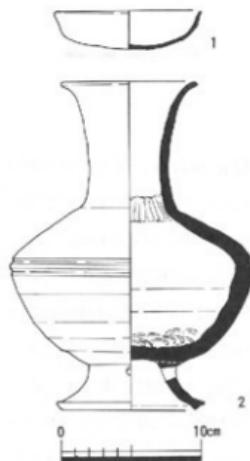


図-23 7号填出土土器

棺釘の出土状況から、幅50cm、長さ170~190cmの木棺が推定される。これは2号墳の木棺とほぼ同じ規模である。このことから木棺の高さを40cmと推定すると、現存している石室の高さよりも高くなる。従って、石室壁面には、もう1、2段石材が積まれていたものと考えられる。

#### ◎ 8号墳

墳丘は、東西5m、南北5mの隅丸方形を呈し、南辺を除く周間に幅1~2m、深さ約20cmの周溝を有する。主体部は小石室で、主軸は、N-7°-Wである。天井石及び側石のほとんどが抜き取られている。石室は、地山を掘り込んで構築されており、奥壁幅55cm、長さ235cm、高さ60cm以上を測る。石室床面には、10~20cmの小石が粗く敷かれており、棺台の役目を果たしたものと考えられる。奥壁より南へ160

cmの位置で金環が3個出土した。このうち2個は外径2.4cm、内径1.2cmで断面梢円形の大形のもので対となるもので、もう1個は、外径2.2cm、内径1.3cmで断面円形の細身のもので、全て銅芯に金の薄板を巻いたものである。細身のものは、7号墳で出土したものと類似しており、対をなしていたものではないかと考えられる。また、7号・8号墳は周溝を共有しあっていることから、強い関係が窺える。

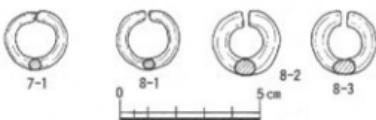


図-24 7・8号墳出土金環

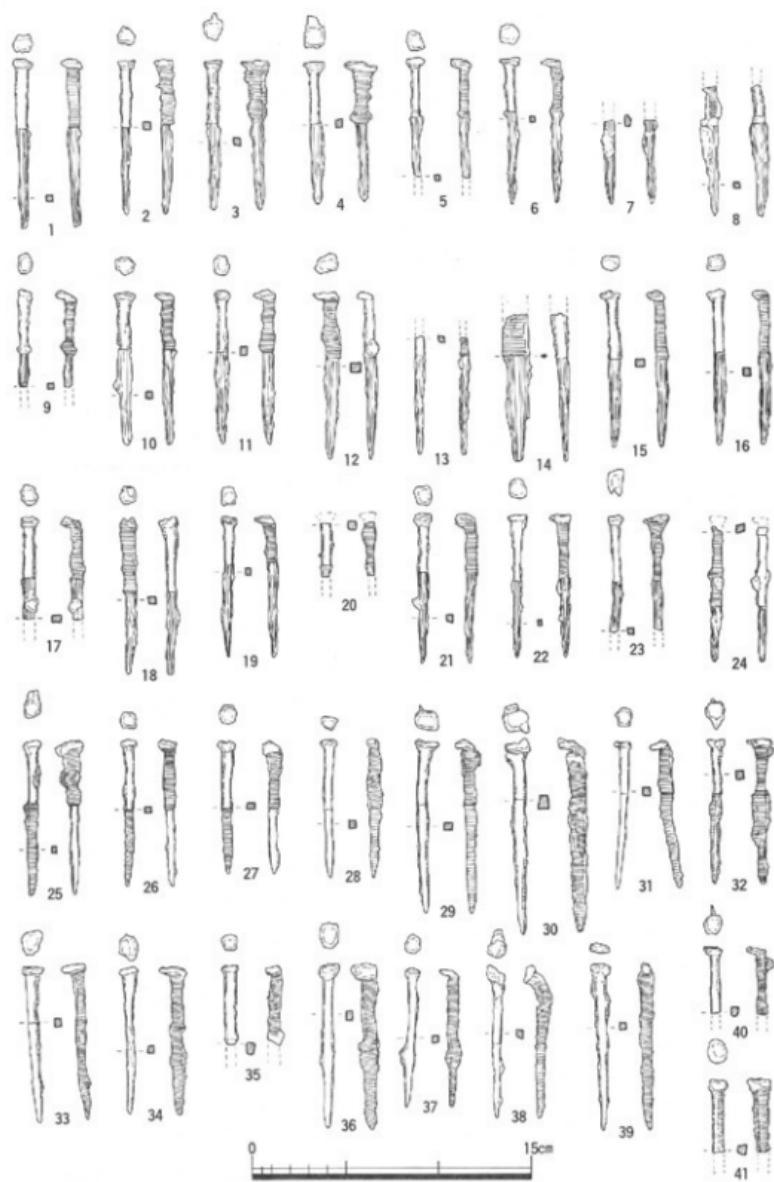


図-25 7号墳出土釘

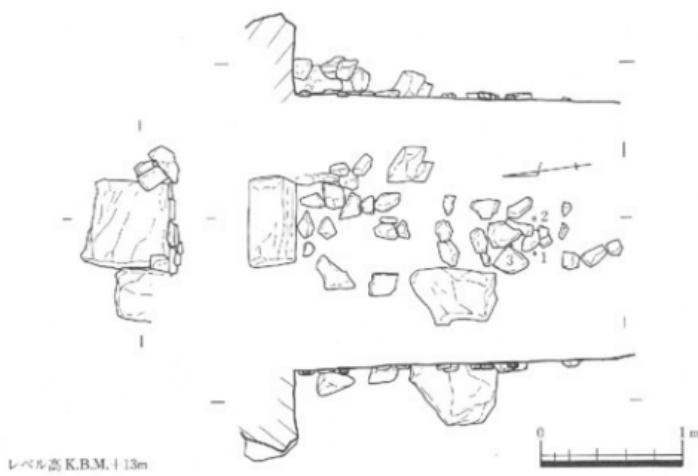


図-26 8号填石室

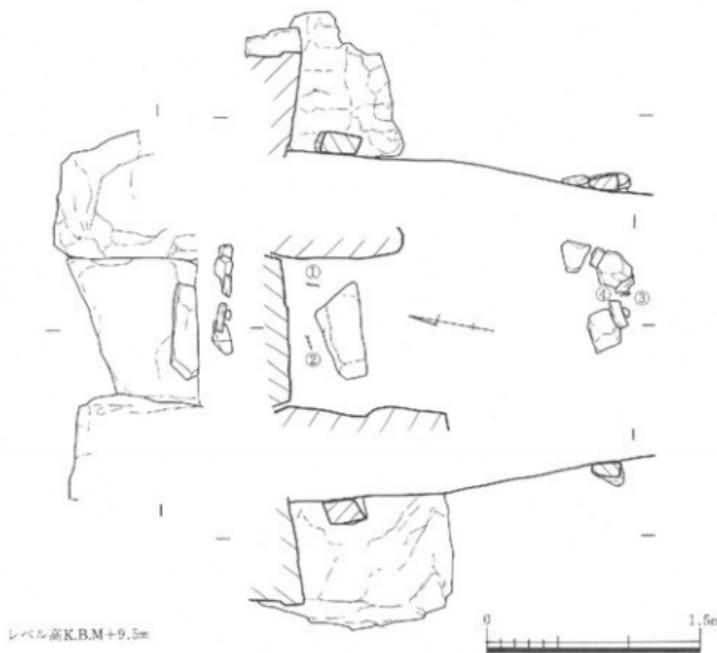


図-27 9号填石室

### ◎9号墳

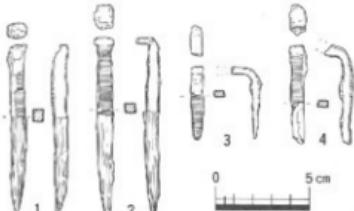


図-28 9号墳出土釘

墳丘は、東西8m、南北8mの隅丸方形を呈し、南辺を除く周囲に幅1.6m、深さ約60cmの周溝を有する。主体部は横穴式石室で、主軸は、S-10°-Eである。奥壁幅1.05m、長さ2.4m以上、高さ1m以上を測る。石材は、1m大の石を使用しており壁面は平らにそろえている。

墳丘南半は、盛土によって構築しているよう

である。石室奥壁側には、棺台と考えられる扁平な石材が1個体遺存している。副葬品は遺存しておらず、棺釘はわずかに4本検出した。棺台の状況からは、1棺のみの埋葬であったと考えられる。釘はA類（①・②）とE類（③・④）のものであるが、③・④はかすがいの可能性もある。北側周溝内には、集石遺構が見られ、周溝内埋葬の可能性も考えられる。

### ◎10号墳

墳丘は、東西12m、南北12mの方形を呈し、西辺及び北辺に幅2~3m、深さ40~50cmの周溝が遺存する。墳丘南半は盛土によって構築されているが、現状では、東南部が著しく低くなっている。主体部は、粘土室木炭櫛とでも呼称すべきもので、特殊な構造を示す。発掘調査で得られた結果から、主体部の構造を復元すると次のようになる。まず墳丘の区画を設定した後、墳丘中央に、東西4.8m、南北5.2m、深さ2.4mの隅丸方形の坑を掘り、その床面中央に15cm~50cm大の上面が扁平な石を、東西2.3m、南北3.5mの方形区画内に敷きつめる。北辺、南辺は、約15cm下げられており段をなす。上段の南北長は2.8mである。外縁は、直線をなさず、ふぞろいである。この石敷の西辺と東辺に沿って径5cmの小さなビットが並ぶ。西辺は3ヶ所で北より1.7m、1.6mの間隔、東辺では5ヶ所で北より1.25m、0.54m、0.65m、1.0mの間隔にある。このビットの埋土内には、微量であるが、炭が含まれている。おそらく枕状のものが立てられていたのではないかと考えられる。次の段階では、石敷の各辺、及び外周に、木炭が置かれる。石敷各辺には、特に多量の木炭が使用されている。また、石敷周辺に広がる炭は、ごく微量であるが、床面全体に広がる。この段階で、石敷外南部分に、土師器の杯身（3）が、炭層の上にうつぶせの状態で置かれている。次の段階では、石敷周辺が石敷上面とほぼ同じ高さまで埋められ、再度、炭が薄く敷かれる。次の段階では、石敷内に東西2.2m、南北2.5mの空間をのこして、周辺を、黄褐色粘土と青灰色粘土、黒褐色粘土等の互層によって版築状に埋め戻し粘土室を構成する。この粘土室の壁面には、木炭が遺存しておりこの遺存状況から粘土室の高さが約70cm前後であったことがわかる。木炭を垂直な壁面に留めておく方法としては、粘土室の内側に木枠を組んで、壁面と木枠との間に木炭をつめたものと考えられる。これを示

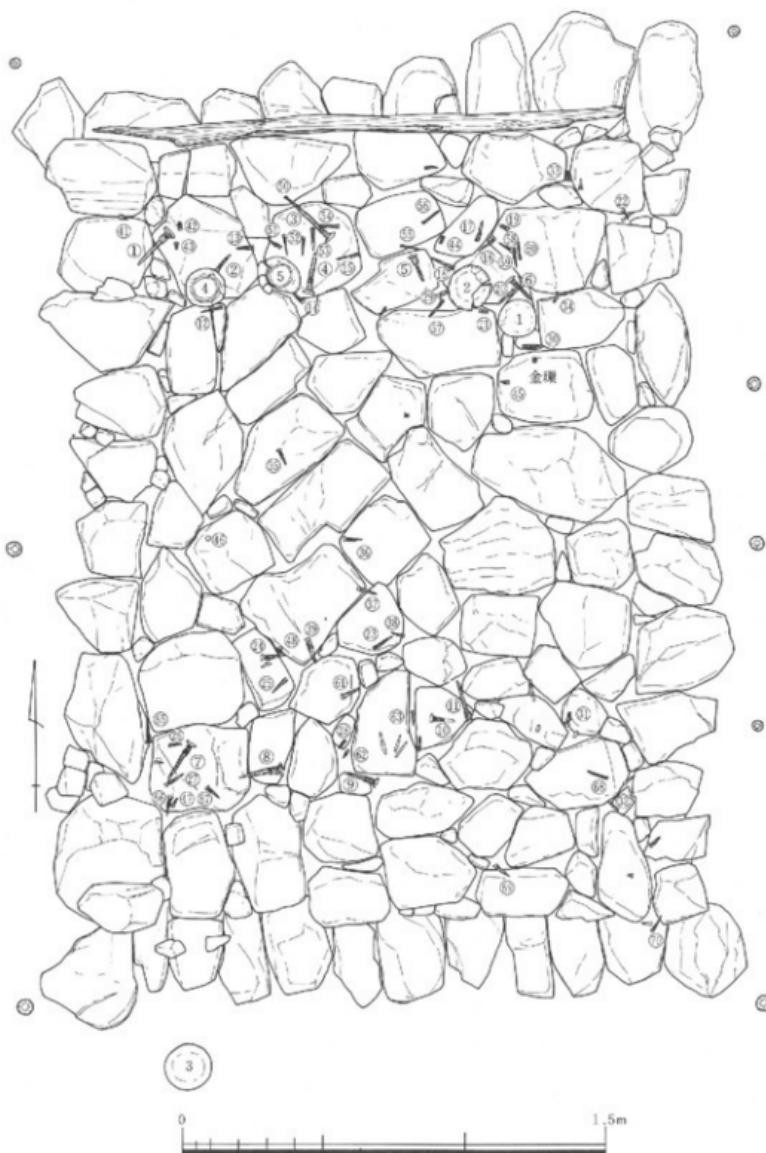


図-29 10号墳遺物出土状況

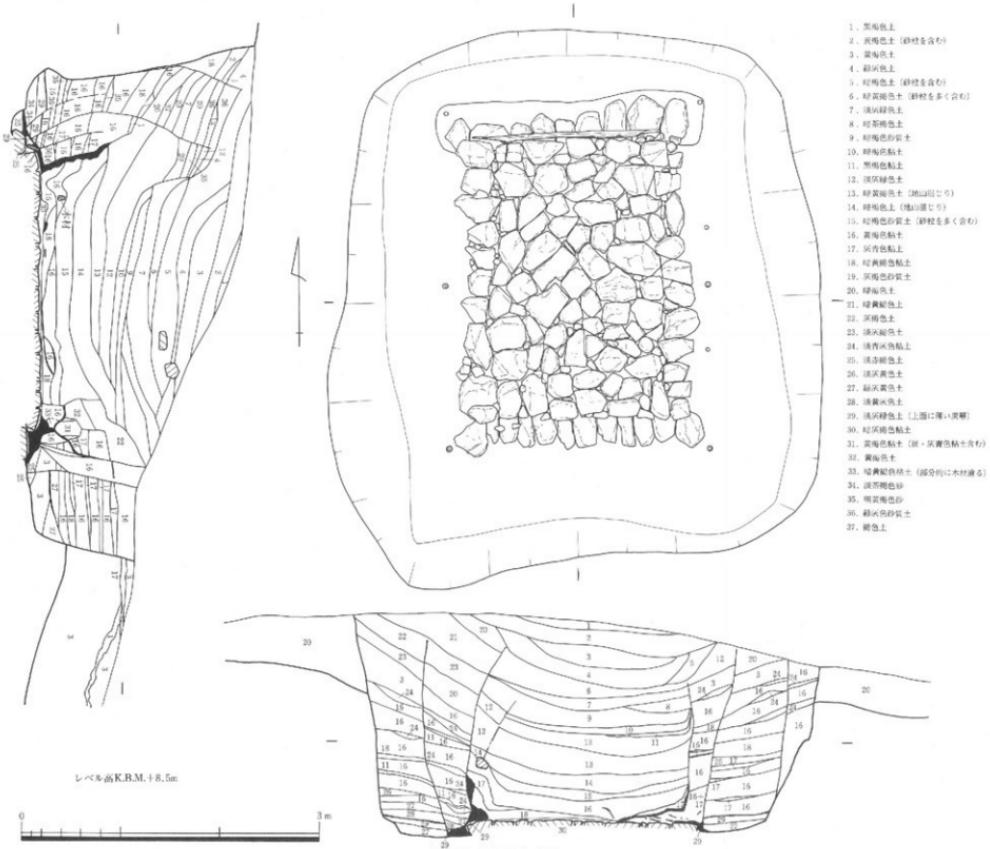


図-30 10号墳主体部

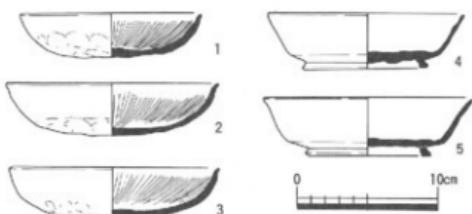


図-31 10号墳主体部内出土土器



図-32 金環

土師器 2 個体は、粘土室内北側中央より東部分に並んで、須恵器 2 個体は、北側中央より西部分に並んで出土している。金環は、土師器の南側から出土しており、外径 2.0cm、内径 1.1cm で、断面円形を呈する。銅芯に金の薄板を巻いたものである。土師器（1）は口径 13.0cm、器高 3.1cm、（2）は口径 15.1cm、器高 4.7cm で、ともに内面に、方射状暗紋を有する。色調は赤褐色、胎土には、雲母・長石を含む。焼成は良好。（1）はうわむき、（2）はうつぶせの状態で置かれていた。須恵器（4）は口径 13.8cm、器高 3.9cm、（5）は口径 14.7cm、器高 4.1cm で、外方にふんばる貼り付け高台を有する。体部は、外縁気味にたちあがり、端部は丸くおさめる。色調は青灰色、胎土には、1mm 以下の砂粒をわずかに含む。焼成は良好。两者ともうつぶせの状態で検出した。また、（4）と石敷との間には釘がさまれていた。釘は、北辺部、南辺部に集中して出土しているが、中央部にも数本遺存していた。釘の種類には、A 類（12～28）、B 類（1～11・29～38）、C 類（39～40）、D 類（50～57）、E 類（41～49）がある。このうち B 類の①～⑪は、長さ 11～17cm と大形のもので、頭部は平らで、径 3～4cm の円形を呈する。また、D 類には、木材の結合部分を示す部分が認められず、全て釘と平行する木目が付着するもので、結合以外の目的に使用されたものである。釘の出土状況からは、棺の復元は、困難であるが、副葬品の出土状況

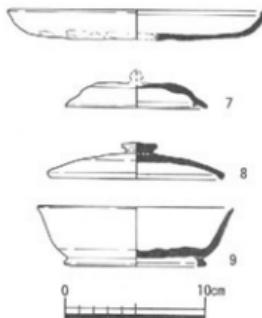


図-33 10号墳出土土器

唆するものとして北辺石敷上段にたてかけた状態で板材が遺存していた。また粘土室西辺、南辺では、木質が粘土化したような状況が観察できた。この粘土室の床面直上、すなわち石敷直上には、金環 1 個、土師器杯身 2 個体、須恵器杯身 2 個体、鉄釘約 90 本が遺存していた。

からおそらく南北に長軸を持つ木棺が 2 棺並列して東西に置かれたものと考えられる。また、出土遺物は、全て敷石面直上、あるいは薄い粘土層をはさんで検出されており、木棺が遺っていた状態で上部の土が堆積したのではなく、木棺の朽壊後、上部の土が堆積したものと考えられる。粘土室天井部は、土層断面からすると、壁面の炭がと見える位置ぐらいにあったと考えられる。その構造は、東西に丸木をわたし、それをもとに板等でおおったものと考えられる。粘土室内北側には、石敷上面に堆積した黄褐色粘土内より東西方向に長さ約 1.23m の木材が遺存しており、先の天井部構造をしる手掛

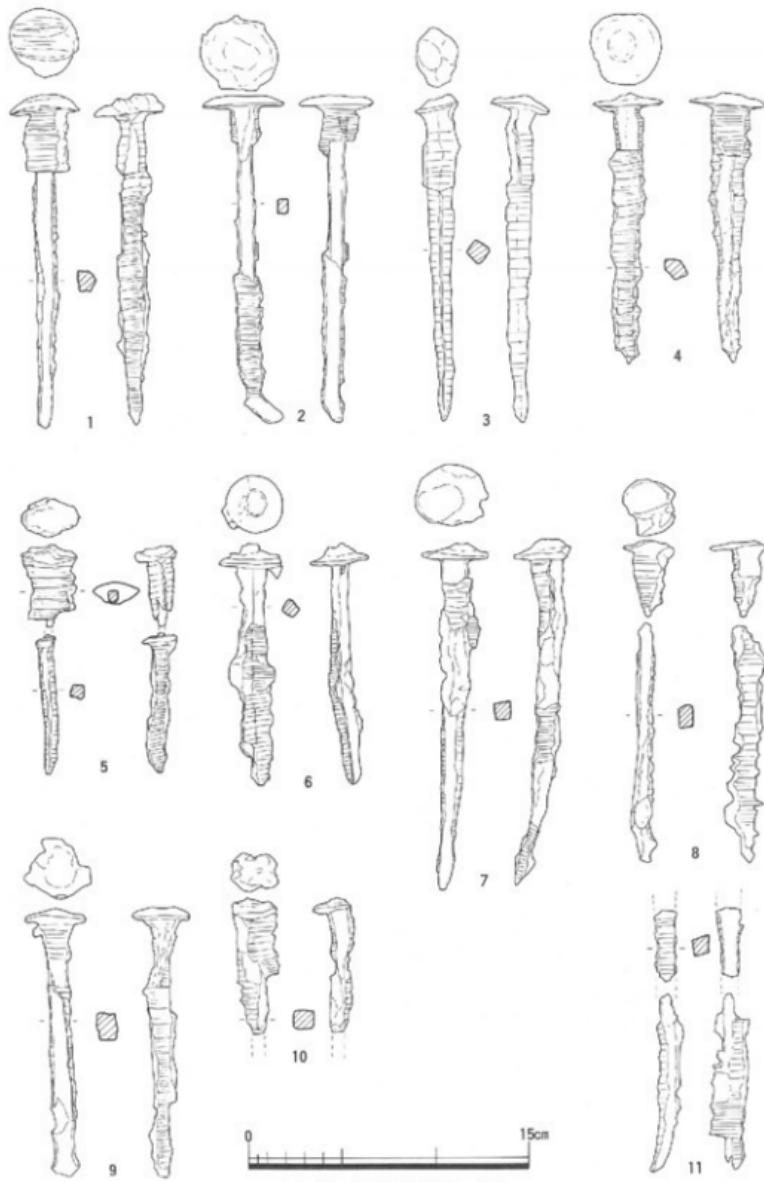


図-34 10号墳出土釘 ①

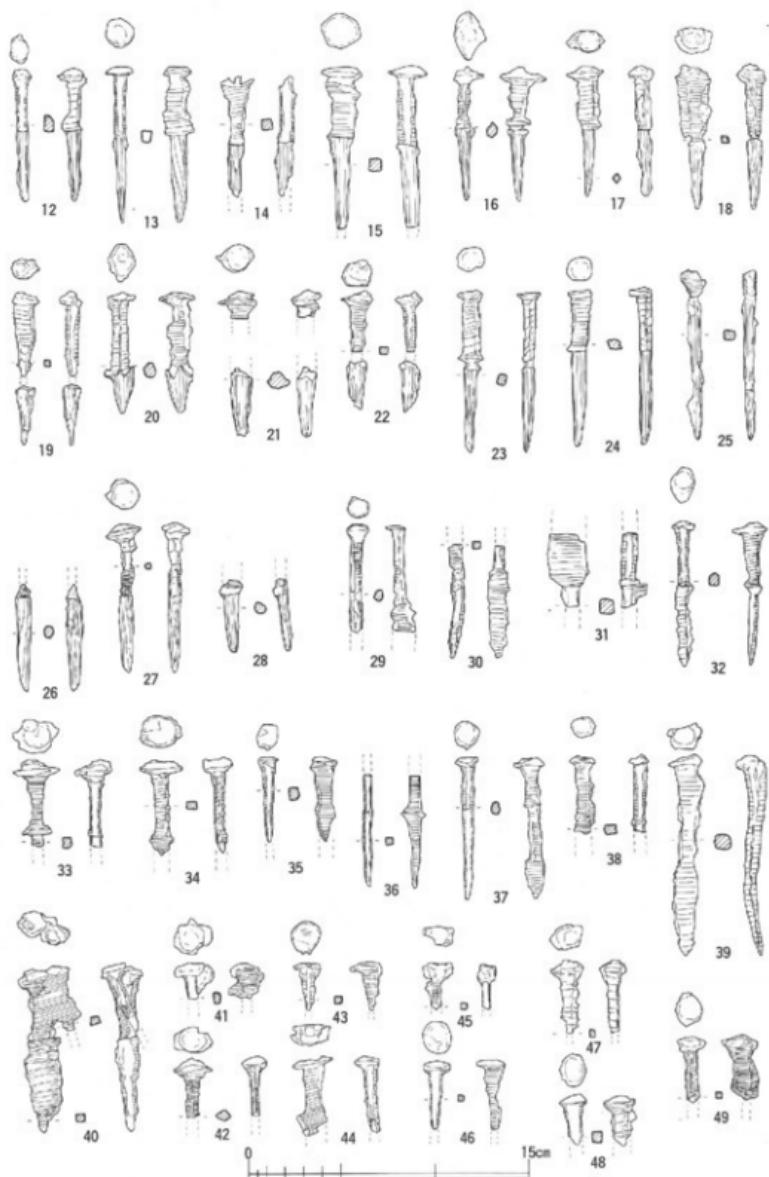


図-35 10号墳出土釘 ②

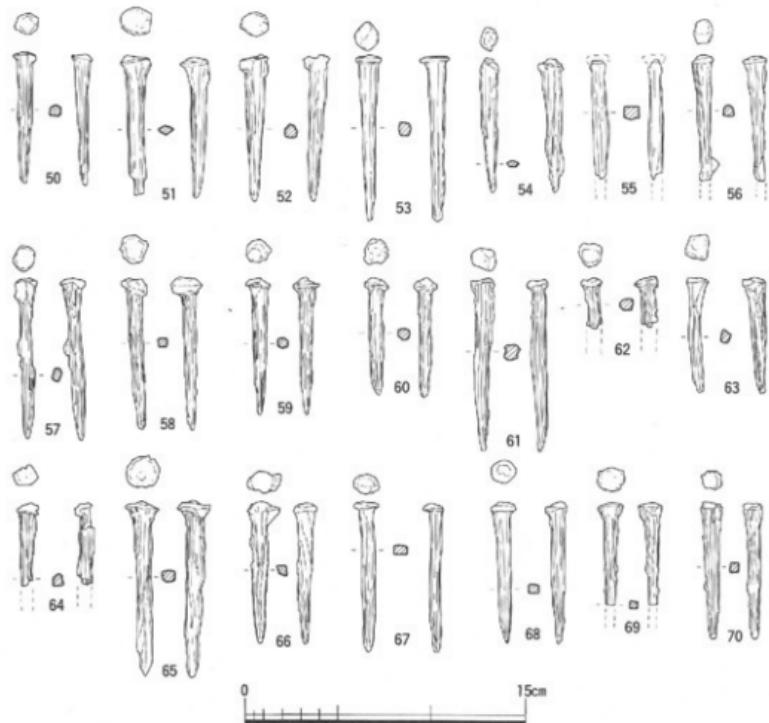


図-36 10号墳出土釘 ③

かりとなるものである。土層断面からは、天井部が朽壊してしまい、その上部の土が落込んでいる状況が観察された。また石敷上黄褐色土あるいは暗黄褐色土等と約5~10cmの厚さの間隔をはさんで部分的に薄い炭層の広がりが見られた。粘土室を構築する際に石敷周辺の木炭のうえに積まれた粘土の部分は、その土圧によって木炭が沈み、粘土室を取り囲む状態で亀裂が走り、平面ではあたかも2重の粘土室がつくられているかのようであるが、本来はいち時につくられたものである。粘土室天井部構築後さらに、上部は埋め戻される。墓壇上面南部分には、30~40cm大の石材が集積されており、埋葬施設の位置を示すものと考えられる。墳丘構築の際の盛土内からは、須恵器杯蓋(7)が、主体部埋め戻しの際の埋土には、土師器皿(6)が、周溝南部分からは、須恵器杯蓋(8)、杯身(9)が出土している。時期は、飛鳥の土器編年で示すならば、(7)がⅢ期、(1~5)がⅣ期、(6・8・9)がⅤ期に位置づけられるものである。

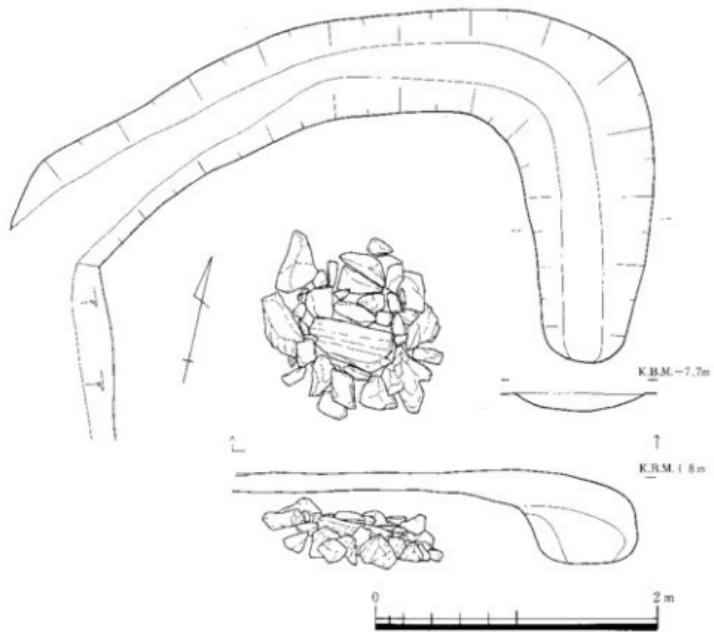


図-37 1号墓

### ◎1号墓

1号墓は、南辺をのぞく周囲に方形の周溝を有し、一边4.5mの方形の区画内中央に、石囲いの施設をつくり、その中に骨蔵器及び副葬品をおさめ、石蓋をしたものである。石囲いの内法は一边60cm、高さ40cmで、平面は方形を呈し、それぞれ壁面を東・西・南・北に向ける。各壁面は、2～3枚の石をたて並べて構成されており、その外周に、裏込めの石材が入れられている。石囲い内床面には、30cm大の平らな石が置かれており、骨蔵器は、その上に傾けた状態で置かれていた。台石と骨蔵器肩部とにはさまれた状態で和同閉塚の銅錢が出土した。銅錢は、4枚が上から順に表・裏・表・表向きの状態で重ねられていた。また、南壁と台石の間からは、和同閉塚の銀錢が1枚出土した。骨蔵器の他に台石東辺に底部を沿わせた状態で須恵器の平瓶、また、それにたてかけた状態で土師器の杯身が置かれていた。右囲いの上部は、3枚の天井石によって塞がれている。この上部に盛土が施されていたかどうかは現状では判断できなかった。骨蔵器は、須恵器の台付短頸壺（3）で、口径14.4cm、器高23.3cmで、胴部上半に最大径を有する。肩部は、やや丸味を持ち、口縁端部は内傾する面を有する。台部は、外方に短くふんばるもので、端部は、上下に少し肥厚する。色調は、灰青色。胎土には、長石を多く含む。焼成

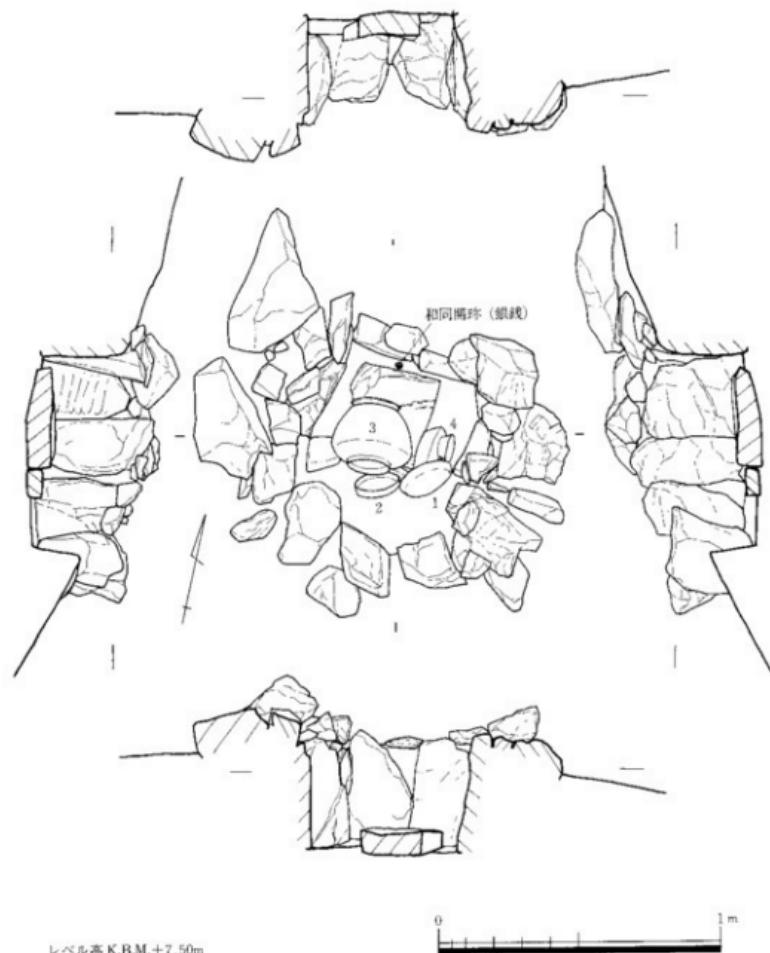


図-38 1号墓遺物出土状況

は良好であるが、内面に焼けひずみによるふくらみが多い。(2)は、(3)の蓋で、口径14.6cm、器高4.2cmを測る。天井部は平らで、中央にだんご状の宝珠形つまみを有する。口縁端部に、内側に短く突出する段を有する。色調は黒灰色、胎土には長石を含む。焼成は良好。平瓶(4)は、口径10.4cm、器高11.4cm、胴部最大径21.6cmで、天井部には、断面方形の把手を有

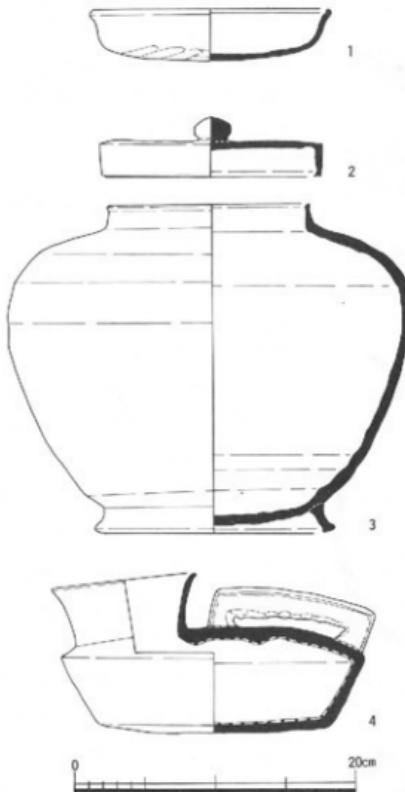
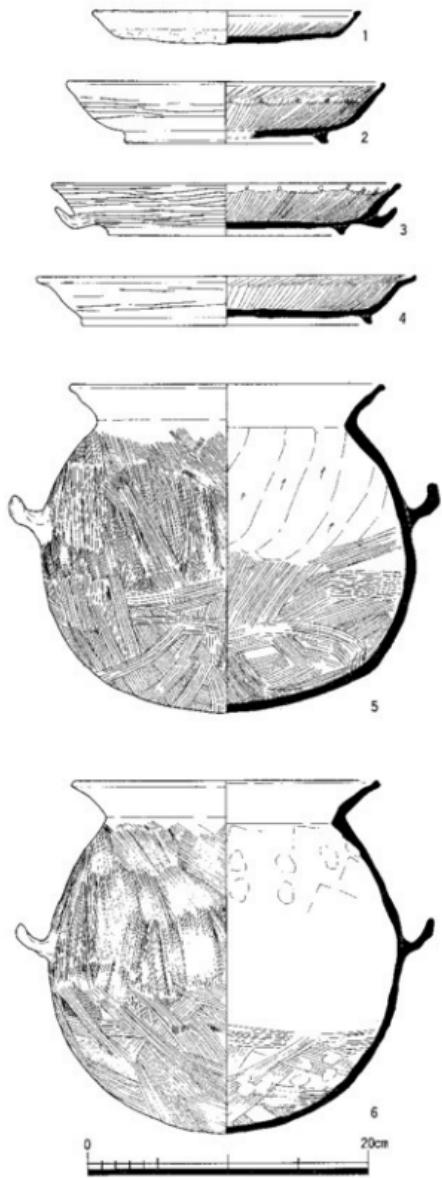


図-39 1号墓出土土器



図-40 和同開珎銀銭

する。底部は扁平で磨滅が見られる。色調は、灰青色。胎土には、小さい砂粒を含む。焼成は良好。土師器杯身（1）は、口径16.5cm、器高3.7cmを測る。体部は平らな底部から内縁気味にたちあがり口縁部でゆるやかに外彎する。口縁端部は内側に軽く巻き込む。底部外面はヘラ削り、他は横ナデによって調整する。内面には、暗紋は見られない。この土師器は、平城宮土器編年のIII期に位置づけられるものである。和同開珎銅銭は、遺存状態が悪く、細片となっているが、外径2.43cm、内側孔一片0.64cm、重さ1.9gを測る。開の字が「開」となっているのが特徴である。和同開珎銀銭は、外径2.43cm、内側孔一片0.54cm、重さ6.9gで、純銀に近く、手ずれも少ない。和銅銀銭の出土例としては、小治田安麻呂墓で、10枚以上出土したものがよく知られているが、発掘調査による出土例は非常に少ない。また、その出土例からは、鎮壇具的な要素が強く感じられる。その中にあって、当資料は、確実に墓に伴うものであり、奈良時代の他界觀を窺い知ることのできる、貴重な資料である。骨蔵器内に納められていた焼骨は細片であるが、頭蓋骨、四肢骨、肋骨等が含まれている。これら焼骨は、骨蔵器が傾いた状態の時の底部（すなわち胸部内面）に堆積しており、そのうえに土が入り込んでいる。この状況から、当初より骨蔵器が傾けて置かれていたと考えられる。



#### ◎ 2号墓・3号墓

2号墓・3号墓は、土師器の鍋を骨蔵器とするもので、東西に10cmの間隔をおいて並んでいた。両墓とも明確な掘形を検出することはできなかった。2号墓は、土師器の鍋（5）を骨蔵器とするもので、内に焼骨をおさめた後、（1～4）の杯身や皿等で焼骨の上部を覆っていた。（1）は、皿で口径18.8cm、器高2.3cmで、胴部は平らな底部より直線的に外傾して立ちあがり、口縁端部は内側に肥厚する。（2）は、杯身で高台を有する。口径22.6cm、器高4.5cmを測る。底部はヘラ削り、口縁部に横ナデを施した後、外面へラ磨き、内面には斜方射状+螺旋状+方射状暗紋、見込み部に螺旋状暗紋を施す。（3）は、把手付の皿で、高台を有する。口径24.6cm、器高3.7cmを測る。平らな底部より内彎しながら立ちあがり、口縁部でわずかに外彎する。口縁端部は肥厚する。把手は貼り付けによるものである。底部には、木葉痕が遺っている。体部内外面は、横ナデを施した後、外面には、ヘラ磨き、内面には、螺旋状+方射状暗紋、見込み部に螺旋状暗紋を施す。（4）は、皿で高台を有する。口径27.0cm、器高3.5cmを測る。平らな底部より内彎気味に立ちあがり、口縁部は大きく外彎する。端部はわずかに肥厚する。以上（1～4）はと

図-41 2・3号墓土器

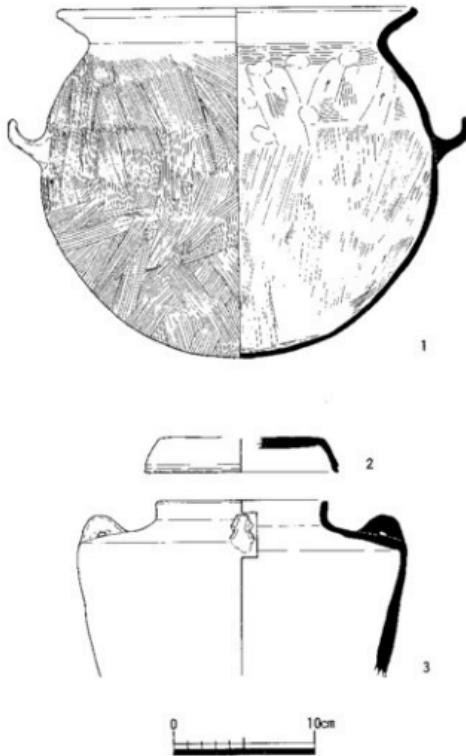


図-42 4号墓土器

もに、色調は赤褐色、胎土には、長石、くさり礫を含む。焼成は良好。（5）は2号墓の骨蔵器として使用されていた土師器の鍋で、口径21.6cm、器高23.2cmを測る。球形の胸部に直線的に外傾する口縁部を有する。口縁端部は上方にわずかに肥厚する。外面胴部上半は16本/cmの細かい縦方向のハケ目、下半は8本/cmの粗い不定方向のハケ目を施す。内面上半はヘラ削り、下半は、指押え後、粗い不定方向のハケ目を施す。口縁部は、内外面とも横ナデ。胸部中ほど、1対の三角形を呈する把手を有する。（6）は、3号墓の骨蔵器として使用された土師器の鍋で、口径21.6cm、器高25.1cmで、球形の胸部に直線的に外傾する口縁部を有する。口縁端部は軽く上方に肥厚する。胴部外面上半は16本/cmの細かい縦方向のハケ目、下半は8本/cmの粗い不定方向のハケ

目を施す。内面上半には、指押え後板ナデ、下半には、指押え後不定方向の粗いハケ目を施す。胸部中ほどに、1対の三角形を呈する把手を有する。（5・6）とともに、色調は赤褐色、胎土には、長石を含む。焼成は良好。骨蔵器内の焼骨は、頭骨、四肢骨等が含まれているが、そのほとんどは、細片となっている。

#### ◎ 4号墓

1号墓の西8.5mの所に位置し、20cm大の石を台石としてその上に、土師器の鍋（1）を骨蔵器として置いている。明確な、据形は検出できなかった。（1）は、口径25.2cm、器高24.8cmを測る。球形の胸部に直線的に外反する口縁部がつく。口縁端部は、わずかに肥厚する。胴部外面上半は、8本/cmの縦方向のハケ目、下半は不定方向のハケ目、内面上半は、ヘラ削り

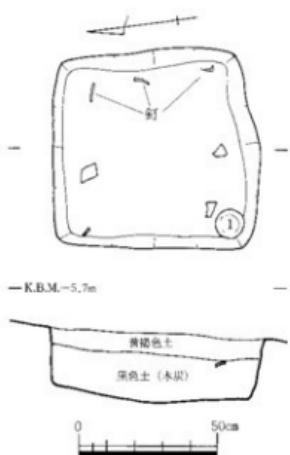


図-43 5号墓

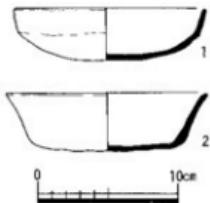


図-44 5号墓出土土器

後横方向のハケ目、下半には、縦方向のハケ目を施す。色調は暗褐色。胎土には、雲母・長石等を含む。焼成良好。これらの墓以外に、この周辺からは（2・3）のような須恵器の破片が出土しており、これらも、おそらく骨蔵器と考えられる。（2）は、蓋で、口径13.5cm、天井部は平らである。口縁端部外面には段を有する。色調は褐色。胎土には、黒色・白色粒を多く含む。焼成は良好。（3）は、短頸壺で肩部に把手を付ける。おそらく4方向につくものと考えられる。口径12cmで、肩部径は23cmである。胴部は、直線的に外傾して肩部で明瞭な稜をなす。色調は、褐色。胎土には、黒色・白色粒を多く含む。焼成は良好。

#### ◎ 5号墓（A地区）

1辺75cm、深さ25cmの方形掘形を有する。掘形内埋土は、2層にわかれ、上層は黄褐色土、下層は木炭層となる。黄褐色土内からは、坑の西南隅より土師器の杯身が1点出土した。木炭層内からは、鉄釘、土師器片等が出土した。鉄釘の出土位置が散乱した状態を示すこと、坑内が焼成を受けていないこと等から、他の地で火葬した土を当坑内に入れたものと考えられる。土師器杯身（1）は、口径13.6cm、器高3.8cmで、口縁部に強い横ナデを施す。底部外面は指押え。（2）の須恵器杯身は、当上坑の北東1.5mの位置で検出したもので、口径14.6cm、器高4.2cmを測る。平らな底部より、外彫り気味にたらあがり、口縁端部は丸くおさめる。

以上に述べた遺構の他に、調査地内からは、1辺0.75~1mで深さ20cmの隅丸方形を呈する土坑を10基近く検出した。土坑の床面・壁面は、焼成を受けて赤色硬化しており、土坑内には炭混じりの暗褐色土が入っている。時期を決める手掛かりに欠けるため、性格等については、今後の検討が必要である。また、焼土坑とは、性格が異なるものとして、B地区より長径4.1m、短径3.4m、深さ0.7mの楕円形を呈する土坑を検出した。坑内からは、奈良時代後半と考えられる土器が、数片出土した。C地区では、黒褐色土を埋土とする溝状遺構を検出した。埋土には、土師器杯身、須恵器台付壺等が含まれていた。古墳に関係する遺構と考えられる。

## 第2章 第2次調査

### 第1節 第2・3次調査に至る経過

第1次調査終了後、調査終了時の状態で放置されていたが、1988年5月に開発許可が認められ、まもなく造成が開始された。その後、12月に至り、第1次調査の東側部分の調査を実施して欲しいと連絡があり、12月13日に埋蔵文化財発掘届出書が提出された。その前後に、数回の協議を実施し、12月中に試掘調査を行い、その結果に基づいて再度協議を実施することになった。

試掘調査は12月19・20日に実施し、遺構・遺物は認められなかった。その際に、造成範囲内でありながら、伐採未了の部分があり、その範囲内に、横穴式石室を主体とする古墳が2基以上存在することを、分布調査で確認した。これを第2次調査とする。

調査終了後、協議を実施し、古墳が確認された部分については人力で伐採した後、全面調査を実施する。また、それ以外の範囲については重機によって伐採した後、試掘調査を実施することで合意に達した。

しかし、1989年1月上旬に伐採状況を確認したところ、古墳周辺を重機によって伐採されたうえ、存在したはずの石室も見当たらなかった。現状では、古墳が確認できなかったが、古墳の周溝や石室基底部は残存している可能性があり、また、他の部分にも古墳が残っていることも考えられたため、1月26日に改めて協議し、2月3日より調査を実施することにした。この調査を第3次調査とする。

### 第2節 調査成果

調査対象地内を北西から南東にのびる主尾根上に幅1m、長さ350mのトレーナーを設定し、調査を実施した。トレーナーのはば全域で、地表直下に地山が検出された。地山は赤褐色、黄褐色の粘土が多く見られ、花崗岩の露頭や風化土の見られる部分もある。標高約330mの調査地内の最高所で方形の焼上坑を検出した。内部には炭、灰がみられるが、遺物を出土しておらず時期は全く不明である。

調査に伴って実施した分布調査によって、ごく一部が開口した横穴式石室2基を確認した。いずれも幅の狭い石室であり、1基は右片袖式と思われる。2基は東西に並ぶ円墳と考えられ、その東側にも、古墳かと思われる高まりが存在した。第3次調査の際に、調査を実施する予定であったため、石室内については確認しておらず、二度と確認できないようになってしまった。

古墳が確認されたため、その西側の尾根上にもトレーナーを設定したが、やはり地表直下で地山がみられ、古墳は検出されていない。

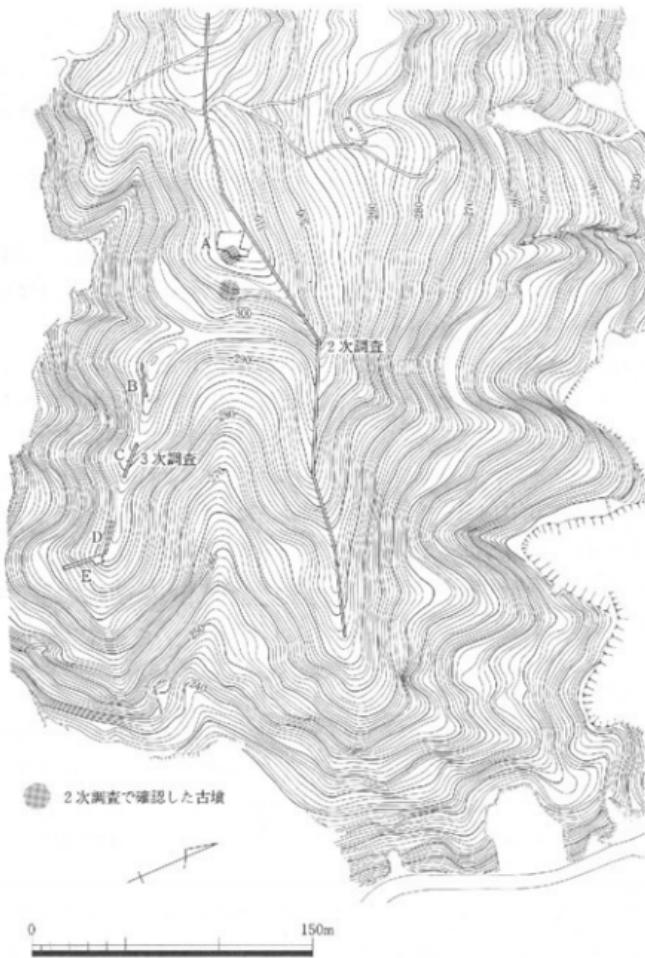


図-45 2次・3次調査区位置図

## 第3章 第3次調査

### 第1節 調査経過

第3次調査は1989年2月3日から2月15日にかけて行った。第2次調査の際に確認されていた、対象地内最高所から東に下る位置にあった古墳の周辺、および南東に下る尾根上に調査区を設定した(図-45)。調査に入る時点では、前章でも報告したように最高所付近には石室の石組は存在せず、また、かっての分布調査で確認された南東に下る尾根上の古墳も(図-1)、一部花崗岩塊の散布は認められるものの、石室の石組として確定できるものは存在しなかった。この尾根では南北斜面部分の樹木の伐採が、一部地山を削るように階段状に行われており、調査区を主に尾根上に限定せざるを得なかった。

調査はすべて人力で行った。各調査区とも表土である薄い腐植土の下は地山になっている部分が多いが、E区斜面部では土器片を含む黄茶褐色土層が存在した。地山は赤褐色、茶褐色粘質土、花崗岩帶礫上などである。

### 第2節 調査成果

A区では土塚、溝それぞれ一基を検出したが、古墳に伴う石室、周溝等の遺構は発見されなかった。土塚は径65×106cm、深さ47cm、溝は幅50cm、深さ30cmを測るが時期は不明である。地山面からサヌカイト製石槍の未製品が1点検出された(1)。製作途中で破損したもので、灰白色を呈すが綾線等に磨滅はみられない。弥生時代のものであろうか。付近に剣片、碎片類の散布は認められなかった。

B～D区では遺構、遺物は検出されなかった。

E区斜面上部では土塚2基を検出した。1基は径2m以上、深さ25cmの浅いもので、覆土に炭化物片が混入していた。他の1基は径195×120cm、深さ41cmを測り、土器片の含まれていた黄茶褐色土を掘込み、灰黒色土を覆土としていた。いずれも時期は不明である。土器は斜面下部で検出された土器器・小形甕の口縁部破片で、茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれている。径10.8cm、外側ナデ、内面指オサエがみられる。6世紀末葉～7世紀初頭のものであろうか(2)。この土器の存在によってE区周辺に古墳の存在が予想されるが、調査成果および周辺の地表観察によても古墳を確認することはできなかった。

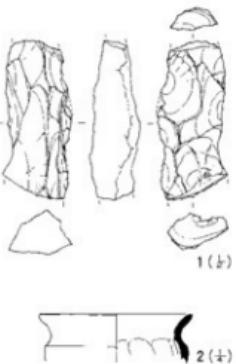


図-46 出土遺物

# 図 版



調査状況（遠景は奈良盆地）



D地区南斜面



C + D 地区全景



B + C + D 地区全景



1号墳石室と周溝



1号墳石室



土器の出土状態



棺釘の出土状態



2号墳全景



2号墳主体部



主体部の堆積



2号墳主体部小口部の棺釘遺存状況



3号墳石室と周溝



3号墳石室



奥壁部の遺物出土状況



土器の出土状況



4号墳石室と周溝



4号墳石室



遺物出土状況



棺釘の出土状況

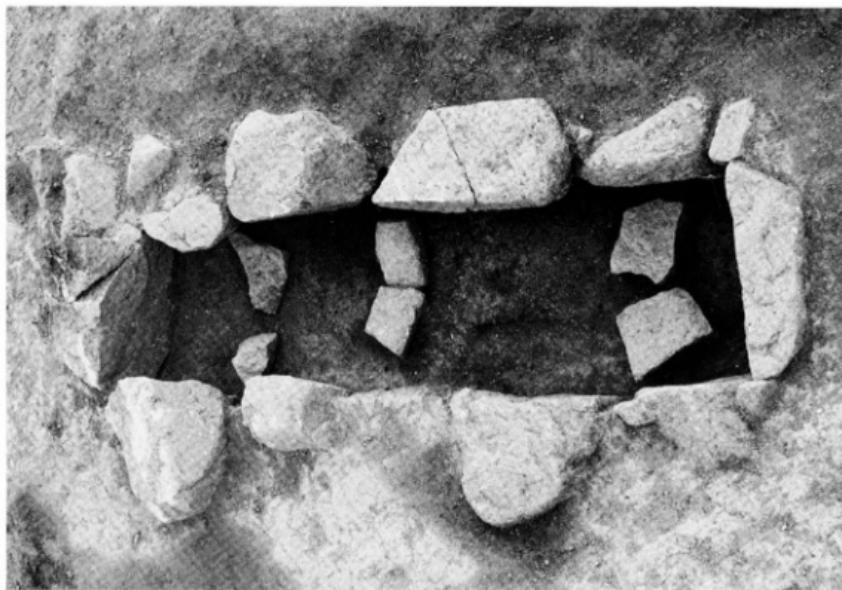
圖版一一  
一次調查  
5号墳・6号墳



5号墳石室



6号墳石室



7号墳石室



7号墳石室南小口部の遺物出土状況



8号墳石室と周溝



9号墳石室



7・8・9・10号墳



10号墳全景



上部の炭層と木材の出土状況



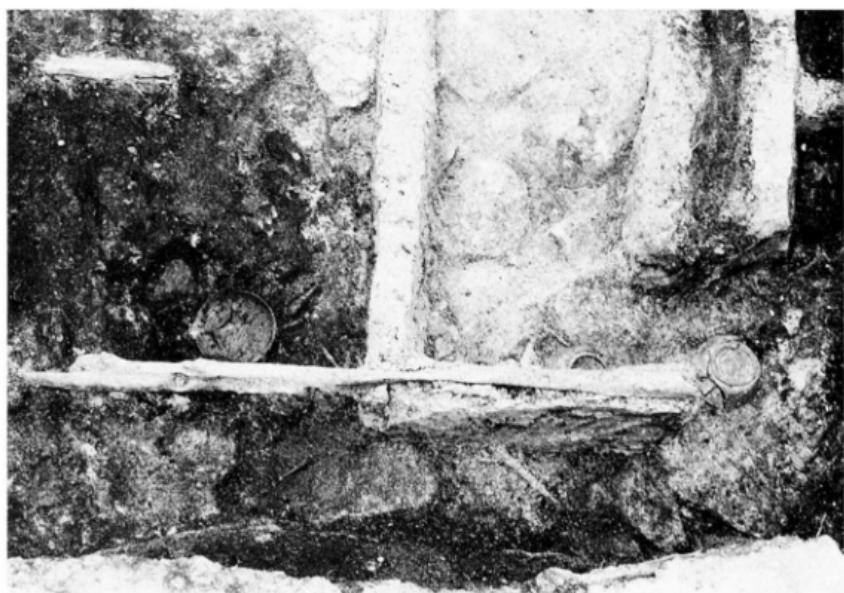
調査状況



10号墳東西土層断面（南から）



10号墳断ち割り状況



10号墳遺物出土状況



10号墳 板材の出土状況



10号墳石敷外周の炭の状況



10号墳石敷



1号墓全景



1号墓石囲いと骨蔵器



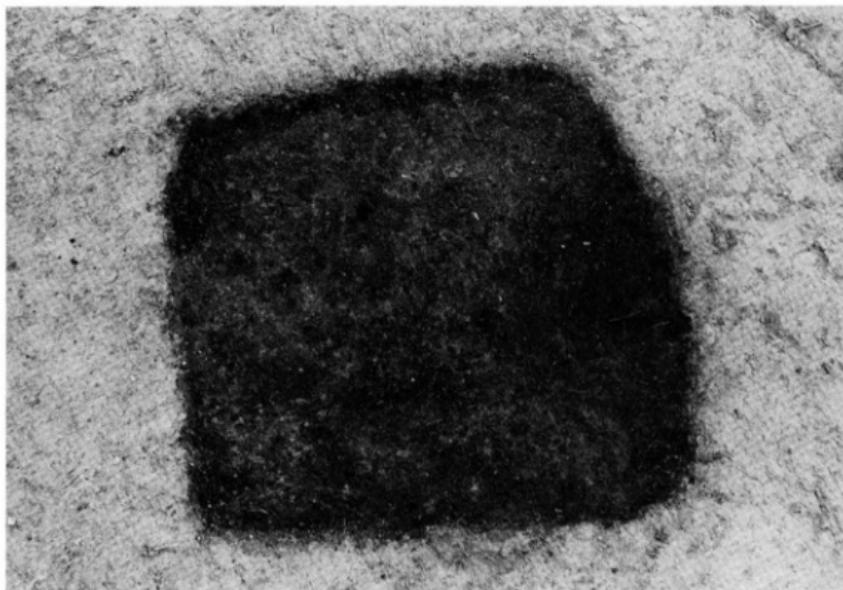
骨蔵器出土状態



遺物取り上げ後、石囲いと台石



2号墓・3号墓



5号墓木炭層



A地区調査状況



A地区トレンチ

図版二三  
1次調査  
B地区・C地区



B地区 土坑



C地区 土坑と溝

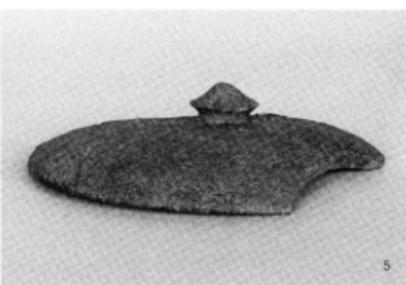
1号墳  
1

2

1号墳



1

5  
4号墳

2

1  
5号墳

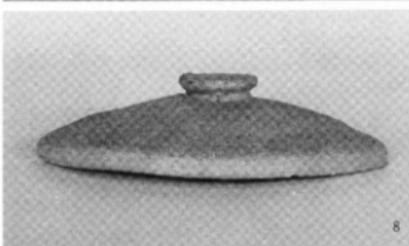
1

3号墳

7号墳



7号墳



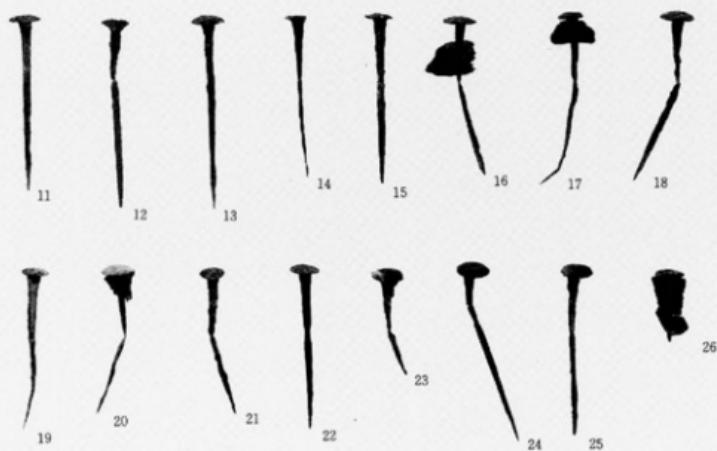
9号墳



1号墳鉄釘



2号墳鐵釘



4号墳鉄釘（1～10）、銅釘（11～26）



7号墳鐵釘

図版三〇 一次調査 古墳出土遺物

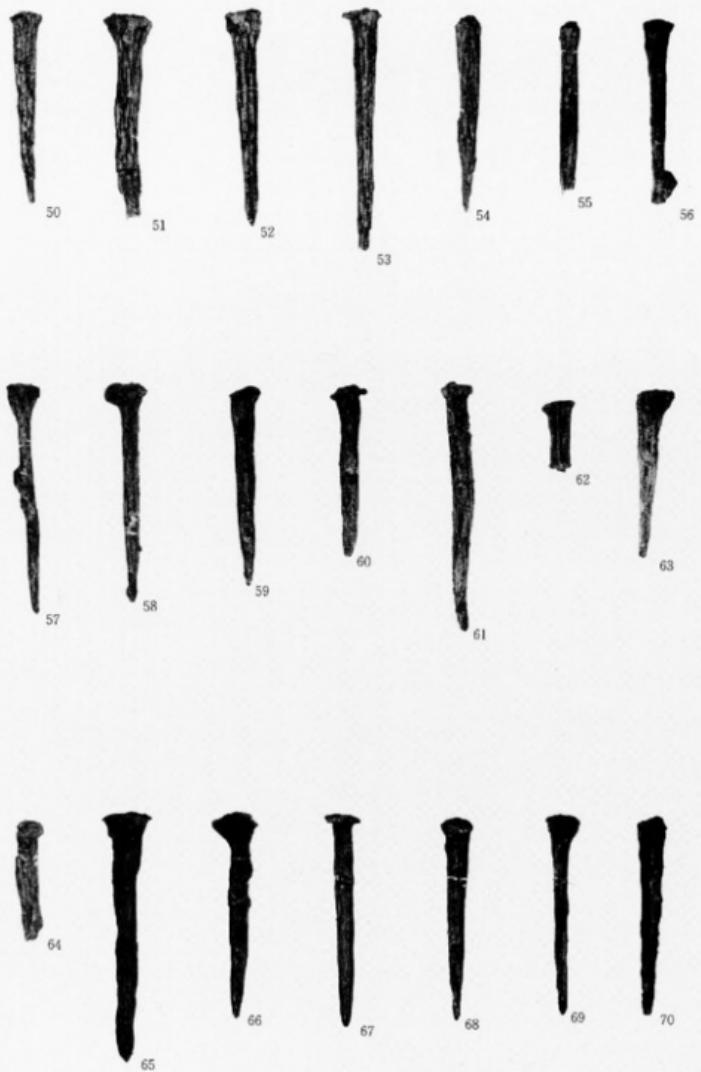


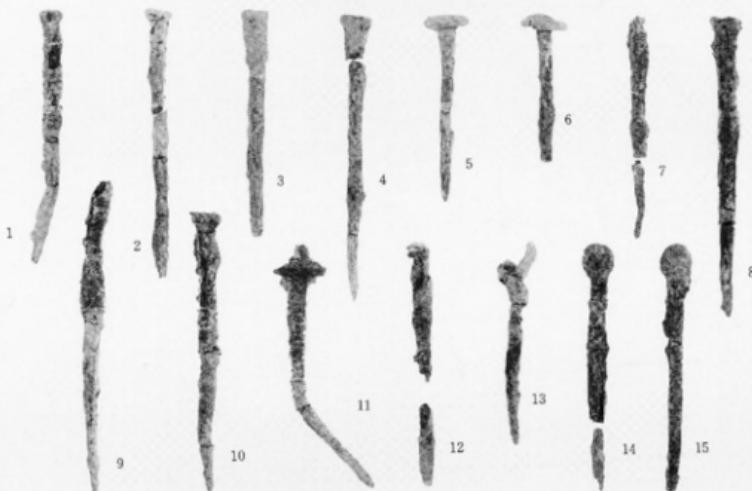
10号墳鉄釘①

図版三 一次調査 古墳出土遺物



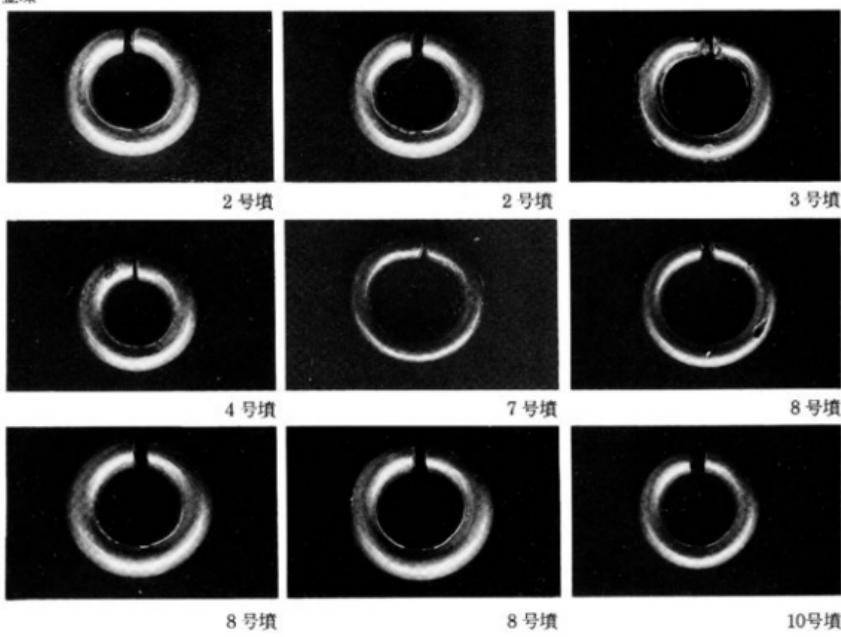
10号墳鉄釘②





3号墳鉄釘

金環





1



2, 3

1号墓出土土器



4



銀錢



銅錢



1号墓出土「和同開珎」



1



2



5



3



4



6



1

2号墓・3号墓

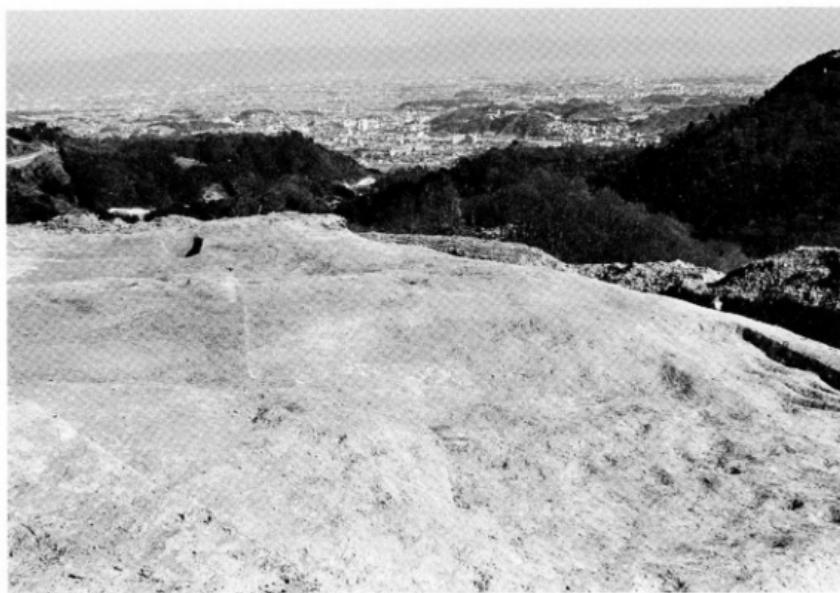
4号墓



調査状況



確認した古墳



A区（遠景は奈良盆地）



E区調査状況

平尾山古墳群

—雁多尾塚49支群発掘調査概要報告書—

編集・発行 柏原市古文化研究会

発行年月日 平成元年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

